

地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業(COC+)

地域イノベーションを推進する
三重創生ファンタジスタの養成

令和元年度 事業報告書

事業協働機関

他大学・高等教育機関

四日市大学
皇學館大学
鈴鹿大学
鈴鹿大学短期大学部
鈴鹿医療科学大学
三重県立看護大学
四日市看護医療大学
三重短期大学
高田短期大学
ユマニテク短期大学
鈴鹿工業高等専門学校
鳥羽商船高等専門学校
近畿大学工業高等専門学校

企業・団体 ※50音順

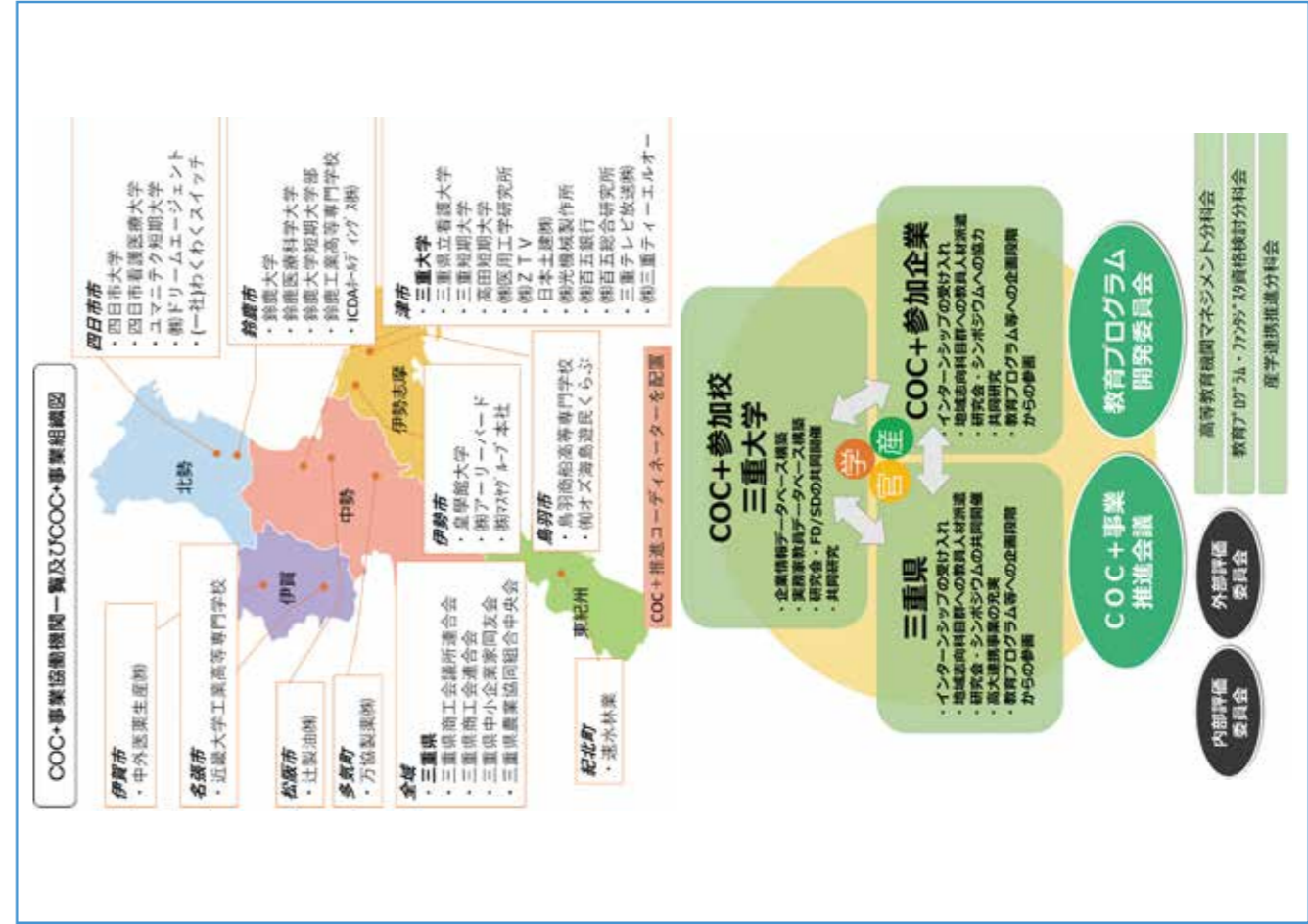
(株)アーリー・バード
ICDA ホールディングス(株)
(株)医用工学研究所
(有)オズ海島遊民くらぶ
(株)ZTV
中外医薬生産(株)
辻製油(株)
(株)ドリームエージェント
日本土建(株)
速水林業
万協製薬(株)
(株)光機械製作所
(株)百五銀行
(株)百五総合研究所
(株)マサグループ本社
三重県商工会議所連合会
三重県商工会連合会
三重県中小企業家同友会
三重県農業協同組合中央会
(株)三重ティーエルオー
三重テレビ放送(株)
(一社)わくわくスイッチ

自治体

三重県

はじめに

平成27年度に文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に三重大が採択され、県内13の高等教育機関、20の企業・団体、三重県を事業協働機関として、事業の推進を開始した。平成30年度には事業協働機関企業を3社増やし、高等教育機関ではユマニテク短期大学も加わる等、事業推進体制を強化してきている。本事業は5年間の補助事業であり、その後はCOC+の後継機関である「高等教育コンソーシアムみえ」がCOC+の機能を備え、継続的に事業を推進していく計画になっている。事業最終年度となる平成31年度～令和元年度においては、事業の総括とともに継続に向けて協議を進め、教育プログラムやCOC+オリジナル授業の継承について整備をした。本報告書では、今年度の改善事項をはじめとして「事業実施体制(運営)」、「教育関係」、「地域連携・情報発信」、「高等教育コンソーシアムみえ(COC+事業継続)」の4つに項目立てし、平成31年度～令和元年度に実施した取組内容を記している。本報告書をご覧いただき、オール三重体制でこれまで実施してきたCOC+の取り組みをご理解いただければ幸甚である。



「地域イノベーションを推進する 三重創生ファンタジスタの養成事業」を振り返って

COC+総括責任者

駒田 美弘(三重大学長)

平成27年度の文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」に採択をされました「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成事業」が、令和元年度末をもって5年間にわたる事業実施期間を終了いたします。本事業は、三重県内のすべての高等教育機関、三重県、県内協力企業等が協働して、地域が求める人材の養成のために必要な教育カリキュラムを提供し、地域創生の中心となる「人材」の養成と地域への集積を図ることを目的としています。具体的には、「食と観光」、「次世代産業」、「医療・健康・福祉」の3つの分野において、地域志向教育を展開し、各々の分野で三重県の新時代を切り開くファンタジスタの養成を実施してきました。



イタリアでは、サッカー界を代表する選手に対して、特定のポジションに関係なく規格外(並外れて優秀な)という意味のフオリクラッセ(Fuoriclasse)という賛辞の言葉を用います。さらに、その中でも、シュートやパス、ドリブル等において、ひらめきや創造性のあるプレーで観客を魅了するスーパースター級の選手に対しては、想像(imagination)という意味のファンタジア(fantasia)に、人を意味する語尾「-ista」をつけてファンタジスタ(Fantasia)と呼ぶ伝統があります。本事業では、地域の様々な課題に関して、多面的な視点から状況や事態を的確に把握し、想像力と創造性に富む発想や思考が可能であるとともに、周りの人と協働して地域のイノベーションを推進できる人材「三重創生ファンタジスタ」を養成してきました。5年間の事業実施期間が終了いたしますが、三重創生ファンタジスタ養成事業は、まだまだ十分な成果を上げているとは申せません。しかし、三重県における「地域創生」を進めるエンジンとなり得る可能性が示されています。

三重県内人口は、出生数の減少と高齢者の死亡数増加による自然減3000人に加え、県外への転出超過による社会減が5000人にのぼり、毎年8000人ほどの減少が続いており、将来の三重県を担う若いリーダーの減少が進みつつあります。その理由として、三重県は、4年制大学進学者収容力が全国最下位であるという状況が大きく関与しています。すなわち、毎年およそ8000人の県内出身者が4年制大学へ進学されますが、三重県内の4年生大学の入学定員の総数は3000人、

37.5%の収容力しかありません。そのため、大学進学時における県内から県外への人口流出率はマイナス30.8%と全国ワーストとなっており、地域のリーダーとなる逞しい人材の育成と確保は、三重県における地域創生、活性化の最重要課題となっています。加えて、三重大学の卒業後、県内企業に就職する学部卒業生の割合は34.1%に過ぎず、県内出身の入学生割合41.5%をはるかに下回っています。高等教育機関への入学から卒業という20歳前後の若い人たちは、大学在学中に、それぞれの将来の進む道、人生の志を決めます。この重要な時期をターゲットとした「COC+事業」は、まさに将来の地域リーダーの育成を目指す事業であると位置付けられます。

現在社会では、人工知能、IoT、ビッグデータやロボティクスの急速な発達と普及により、今まで経験したことのないスピードでパラダイムシフトが進みつつあります。今まで人間が担当してきた多くの職業が、この先10年の間に90%の確率で機械がその業務を行えるようになってしまい、さらには、2045年には1000ドルのコンピュータの演算能力が人類全体の能力を超え、人間が機械を制御できなくなるという「シンギュラリティ」が来ると言われています。機械が、人間に対して、「あなたの最終ゴールは何か、何を目的に生きているのか」を尋ねた時には、機械が人間を不要なもののみならずことのないように、人間はしっかりと答えなくてはなりません。今時の学生は、何事にもやや消極的で、安定志向であると言われてはいますが、凄まじいスピードで変動する社会の中でも、逞しく自分の人生を切り開いていける人材は多くおられるように感じます。「三重創生ファンタジスタ」は、「シンギュラリティ」の訪れる2045年においても、高度に発達した人工知能を持つ機械にも十分に対峙できる人材であろうと思います。

科学・技術の進歩の加速するexcitingな現代社会においては、教育の果たす役割はますますその重要性を増していきます。今後とも、企業、行政、高等教育機関が協働して、逞しい地域人材の育成を目的とした「三重創生ファンタジスタ養成事業」の進化、定着を図っていただくと考えております。地域の皆様方には、引き続き、ご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

目次

<はじめに>	
三重大学COC+イメージ図	3
学長挨拶	4
<達成状況の要因分析と改善>	
今年度の取り組み(改善事項)	8
<事業実施体制(運営)>	
COC+の運営体制(各種会議)	13
会議での主な実績	15
外部評価委員会各委員の評価(平成30年度事業評価)	16
<教育関係>	
三重創生ファンタジスタ資格	18
スタートアップセミナー	20
三重の歴史と文化	21
食と観光実践	24
医療・健康・福祉実践	27
地域発見型インターン	30
自然環境リテラシー学	33
三重の産業	34
PBL型後期集中講義(次世代産業実践、三重の地場産業)	35
地域志向型ルーブリック	36
教育プログラムの成果	38
<地域連携・情報発信>	
COC+シンポジウム	40
三重創生ファンタジスタクラブ(MSFC)	45
三重創生ファンタジスタ成長アンケート	50
三重ラーニングジャーニー	53
Jobキャラバン	54
高校生向け公開講座	58
みえインターンシップフェスタ	59
三重大学地域拠点サテライト	60
県内就職率向上のための様々な取り組み	62
中小企業との共同研究スタートアップ促進事業・地域貢献活動支援事業	64
<高等教育コンソーシアムみえ(COC+事業継続)>	
高等教育コンソーシアムみえの実施会議	67
高等教育コンソーシアムみえ	69
<資料一覧>	
各種制作物	75
<おわりに>	

達成状況の 要因分析と改善

今年度の取り組み(改善事項)

外部評価委員会及び内部評価委員会で受けた評価をもとに今年度の取り組みを再検討し、実施した内容をピックアップして本報告書の項目(「事業実施体制(運営)」、「教育関係」<地域連携・情報発信 イベント実施等>、「<高等教育コンソーシアムみえ(COC+事業の継続性)>」)に沿って下記のとおりまとめた。

● 運営(事業実施体制の整備に関する事、事業の推進に関する事)

・学生の参画

三重創生ファンタジスタ資格を取得した学生が、主体的に運営に関わることができるように体制を整備していくことが望まれている。学生たちが普段から取り組んでいる地域活動について発表する「みえまちキャンパス」(詳細はP.71参照)は、学生が企画・運営から携わるイベントであり、COC+事業の後継組織である高等教育コンソーシアムみえの地域貢献部会の活動として続けていく予定である。

・高等教育機関とのコストシェア

高等教育機関との連携の中で、教育プログラムを協働で設立・指導している体制が評価されている。三重創生ファンタジスタ教育プログラムについては、COC+事業終了後も教育連携部会(第2分科会の後継組織)において検討され、継続していく予定である。複数の大学教員が共同でシラバスを作成してきたCOC+オリジナル科目についても、継続して実施される予定である。

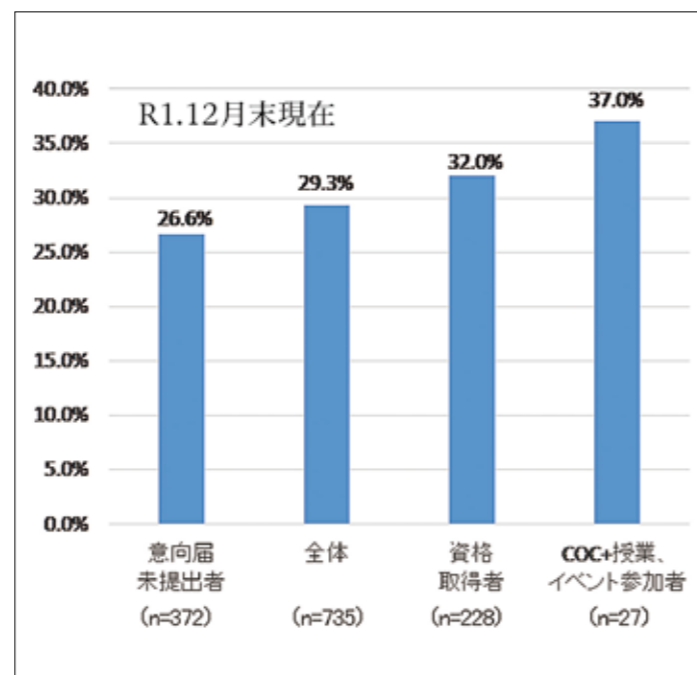
● 教育(教育プログラムの開発に関する事、教育プログラムの実施に関する事)

・「三重創生ファンタジスタ資格」

有資格者の実態調査

本事業の成果検証の1つとして、有資格者の就職先の分析が望まれている。三重大学における三重創生ファンタジスタ資格取得者及びCOC+授業・イベント参加者と三重創生ファンタジスタ資格を取得していない学生(=意向届未提出)の県内就職率の比較を行ったところ、右のグラフのとおりとなり、COC+授業・イベントに参加した学生が最も高いことがうかがえる。

また、平成30年度からベーシック資格取得者、今年度からアドヴァンス資格取得見込者が就職活動を開始しており、事業協働機関をはじめとした県内企業からは、様々な反響をいただいている。



■ 県内企業からの三重創生ファンタジスタ採用の声

- ・採用応募書類に三重創生ファンタジスタ資格を記載してきた学生がいた。
- ・三重創生ファンタジスタ資格をエントリーシートに記載した学生が採用面接にやってきた。非常に優秀で地域に貢献する意欲が高く、内定を出した。
- ・これまで三重大学からの採用はなかったが、COC+に関わるようになって初めて採用した。
- ・三重創生ファンタジスタ資格を取得見込の学生が面接にやってきた。資格や県内での地域活動について自信を持ってアピールしてくれたので内定を出した。

・教育プログラムと学生の地域に対する意識

学生の実態調査として、三重創生ファンタジスタクラブに所属する学生を対象に、クラブでの地域活動が自身の成長にどのように結びついているかを調査した。(詳細はP.50参照)

・三重創生ファンタジスタの活躍

「三重創生ファンタジスタクラブ」以外でも、三重創生ファンタジスタ資格取得予定者並びに資格取得者が、教育の効果を表現、発揮できるような活躍の場の提供と、それによって学びが一層深まる仕組みづくりを期待されている。COC+及び高等教育コンソーシアムみえでの学生発表の場がある場合、事業協働機関へポスター掲示依頼等をしている他、三重大学では学生全員へ開催案内を通知している。

● 地域連携・情報発信(地域との連携に関する事、事業の情報発信に関する事)

・企業情報データベースの運用

企業情報データベースについて、利活用の促進が求められている。本データベースについては、登録業者が増える都度学生に周知を行っている。令和元年度12月現在は、年間延べ3,382アクセス(運用開始から延べ6,103アクセス)があった。また、145の県内企業・団体に賛同いただいた本データベースは、COC+事業終了に伴い、令和2年3月31日をもって閉鎖することとしているが、企業に対して、三重県が運営するマッチングサイト等(令和2年1月運用開始)に移行を促進する予定である。



(三重県のホームページより引用) <https://www.mie-uij.jp/>

三重県では、若者を中心とした転出超過や県内中小企業の労働力不足を解消するため、県内企業等の求人情報を検索・参照するためのマッチングサイトを開設するとともに、東京圏(※)からサイトを通じて県内へ就業し、移住した人に対して、市町と連携して移住支援金を給付する、三重県移住・就業マッチング支援事業をスタートします。

※ 東京都、神奈川県、埼玉県及び千葉県

また、三重大学においては令和2年4月から構内2箇所の食堂でデジタルサイネージの運用を予定しており、学生に向けた新たな企業情報発信のツールとするなど、三重創生ファンタジスタの養成事業に活用する方針である。

● 数値目標 (数値目標の達成状況)

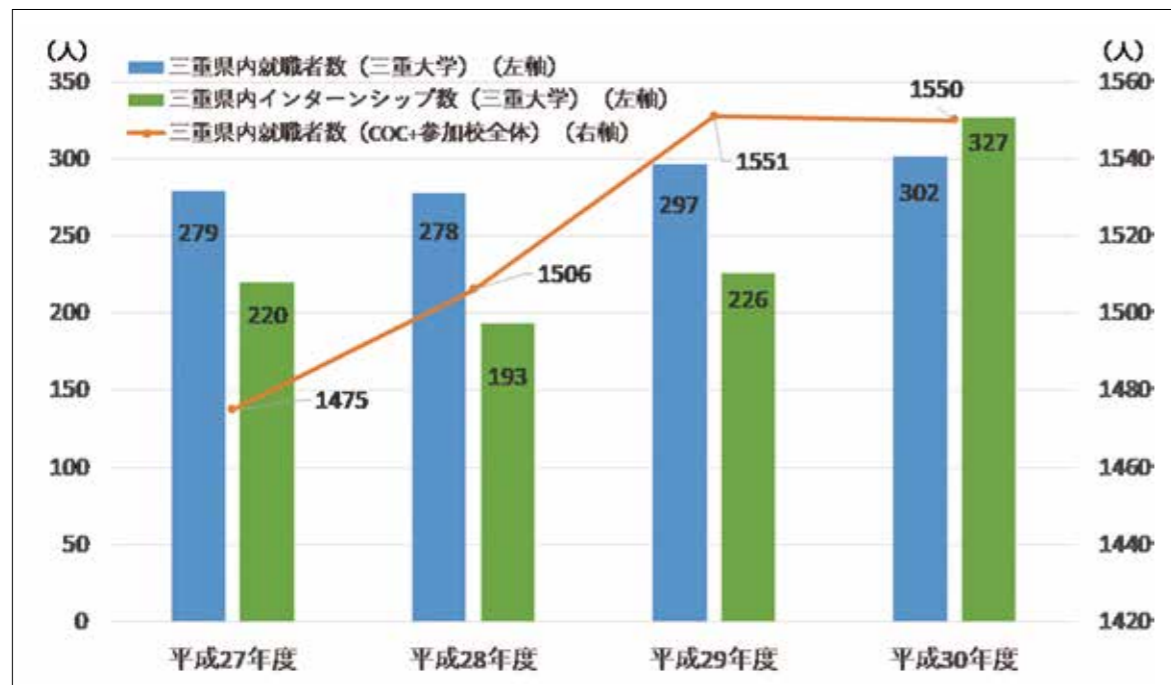
・事業協働機関雇用創出者数

事業協働機関における雇用創出者数は、平成29年度に数値目標を達成したところであるが、その後平成30年度の実績が大幅に低下したため、状況の分析を課題として挙げられた。本件については単なる雇用創出ではなく、新規プロジェクト等を発足した場合の雇用創出を対象としているため、経済動向によって左右されることもあり、丁寧な調査が必要である。

・COC+ 大学における県内就職者数

三重大学では、下記グラフのようにCOC+ 事業開始の平成26年度以降、徐々に県内就職者数が増えており、平成30年度の県内就職者数は約10年ぶりに300名を超えた。

さらに三重大学ではインターンシップの卒業要件化を整備し、令和元年度入学生より適用することとなっている。



● 高等教育コンソーシアムみえ (COC+事業の継続性)

・事業の継続

高等教育コンソーシアムみえは、県内高等教育機関相互並びに県内高等教育機関と地域との連携を促進することにより、県内高等教育機関の教育、研究、地域貢献の各機能の向上を図り、人口減少の抑制及び地域の活性化を実現することを目的とし平成28年に設立された。現在県内14高等教育機関、三重県が参加している。令和2年度へ向け、コンソーシアムの新部会として「教育連携部会」を設置し、三重創生ファンタジスタ教育プログラムを継続する。

<教育連携部会で取り組む主な業務>

- 三重創生ファンタジスタ資格認定制度の継続 (ベーシック、アドヴァンス、エキスパート)
- 県内高等教育機関で連携をしながら COC+ オリジナル科目を継続 (3~5科目)
- 単位互換の充実

<コンソーシアムみえの組織運営について>

予算については所属する各高等教育機関及び、三重県の負担金を基本的な財源として、組織運営を行う他、事業受託を継続的に実施することとしている。(詳細は P.73 を参照)

事業実施体制(運営)

各種会議

COC+ 事業の推進にあたり、定期的に下記の会議を開催し、事業協働機関との連携を図っている。

COC+事業推進会議

COC+における数値目標を達成するため、各会議体及び事業協働機関から挙げられた審議事項やその他COC+の推進に関し必要な事項を扱う。

令和元年度現在の構成メンバー

三重大学	四日市大学	皇學館大学
四日市看護医療大学 (医療系)	高田短期大学 (短期大学代表)	ユマニテク短期大学 (短期大学代表)
鈴鹿工業高等専門学校 (高等専門学校代表)	三重県	三重県商工会議所連合会
三重県商工会連合会	三重県農業協同組合中央会	

教育プログラム開発委員会

COC+における教育プログラムについて、各会議体及び事業協働機関から挙げられた審議事項やその他教育プログラムの開発及び実施に関し必要な事項を扱う。

令和元年度現在の構成メンバー

三重大学	四日市大学	皇學館大学
三重県立看護大学 (医療系大学代表)	鈴鹿大学短期大学部 (短期大学代表)	近畿大学工業高等専門学校 (高等専門学校代表)
三重県	株式会社マスマグループ本社	ICDA ホールディングス株式会社
中外医薬生産株式会社		

〈分科会〉

各分科会は、教育プログラム開発委員会の直下であり、事業計画に基づき実務を行う。

高等教育機関マネジメント分科会(第一分科会)

数値目標達成に向けた具体的方策や県内就職率向上に向けた入口・出口戦略、企業情報データベースの活用方法等の検討を行う。

令和元年度現在の構成メンバー(分科会長:三重県)

三重県	三重大学	四日市大学
皇學館大学	鈴鹿医療科学大学	鳥羽商船高等専門学校
株式会社ドリームエージェント	一般社団法人わくわくスイッチ	

教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会（第二分科会）

県内高等教育機関が連携した教育プログラムの事業終了後の継続や三重創生ファンタジスタ エキスパート資格の創設、教育プログラムの成果の検証方法等の検討を行う。

令和元年度現在の構成メンバー（分科会長：四日市大学）
 全ての高等教育機関（計14高等教育機関）

産学連携推進分科会（第三分科会）

三重創生ファンタジスタ資格の広報や企業情報データベースの充実・広報、事業協働機関満足度向上に向けた方策等の検討を行う。

令和元年度現在の構成メンバー（分科会長：株式会社百五総合研究所）

株式会社百五総合研究所	中外医薬生産株式会社	株式会社医用工学研究所
三重県中小企業家同友会	株式会社サン浦島	大王運輸株式会社
有限会社深緑茶房	有限会社野瀬商店	扶桑工機株式会社
株式会社ハツメック	株式会社中村製作所	株式会社前田テクニカ
橋本電子工業株式会社	株式会社ヒラマツ	株式会社メディサポジャパン
三重県	三重大学	

内部評価委員会

9月に開催し、上半期の進捗状況の確認と、下半期の戦略及び令和2年度以降の体制について検討する。

令和元年度現在の構成メンバー
 全ての事業協働機関

外部評価委員会

評価対象年度の1年間の取組を評価し、数値目標達成に向けた助言等を行う。

令和元年度現在の構成メンバー

岐阜大学 教授	東海旅客鉄道株式会社 特別顧問
公益社団法人みえ犯罪被害者総合支援センター カウンセラー	三重大学 監事

主な実績

- COC+事業推進会議（5月開催、2月開催予定）
 三重創生ファンタジスタ エキスパート資格の内容検討や事業終了後の高等教育コンソーシアムみえへの移管に関する協議等を行った。（2月は教育プログラム開発委員会と合同開催）
- 教育プログラム開発委員会（5月開催、2月開催予定）
 教育プログラム開発委員会直下の分科会の取組報告や事業計画の検討、教育プログラムの実施状況や三重創生ファンタジスタ資格取得者数の確認等を行った。（2月は事業推進会議と合同開催）
- 第一分科会（4月、7月、10月開催、2月開催予定）
 数値目標の達成や下位目標の設定、三重創生ファンタジスタ資格の魅力発信の機会の創出、インターンシップ数の増加、出口戦略の強化、企業情報データベース等に関する検討を行った。
- 第二分科会（4月、6月、8月、10月、12月開催、2月開催予定）
 三重創生ファンタジスタ エキスパート資格の取得要件、選考方法等の決定や取得希望者の面接評価、県内高等教育機関が連携した教育プログラムの継続等に関する検討を行った。
- 第三分科会（令和元年度5月、7月、10月、1月開催、3月開催予定）
 三重創生ファンタジスタの広報やCOC+補助期間終了後の分科会の継続に関する検討を行った。また、三重創生ファンタジスタ資格取得見込者との意見交換を実施する予定である。
- 地域創発部門会議（各月開催（5月、8月除く）、2月、3月開催予定）
 三重大学三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースの継続や三重創生ファンタジスタ エキスパート資格、副専攻コース対象科目等に関する検討を行った。
- 内部評価委員会（9月開催）
 外部評価委員会の評価結果及び分科会の進捗状況の確認、令和2年度以降の体制に関する検討を行った。
- 外部評価委員会（6月開催）
 平成30年度のCOC+における取組の評価を行った。

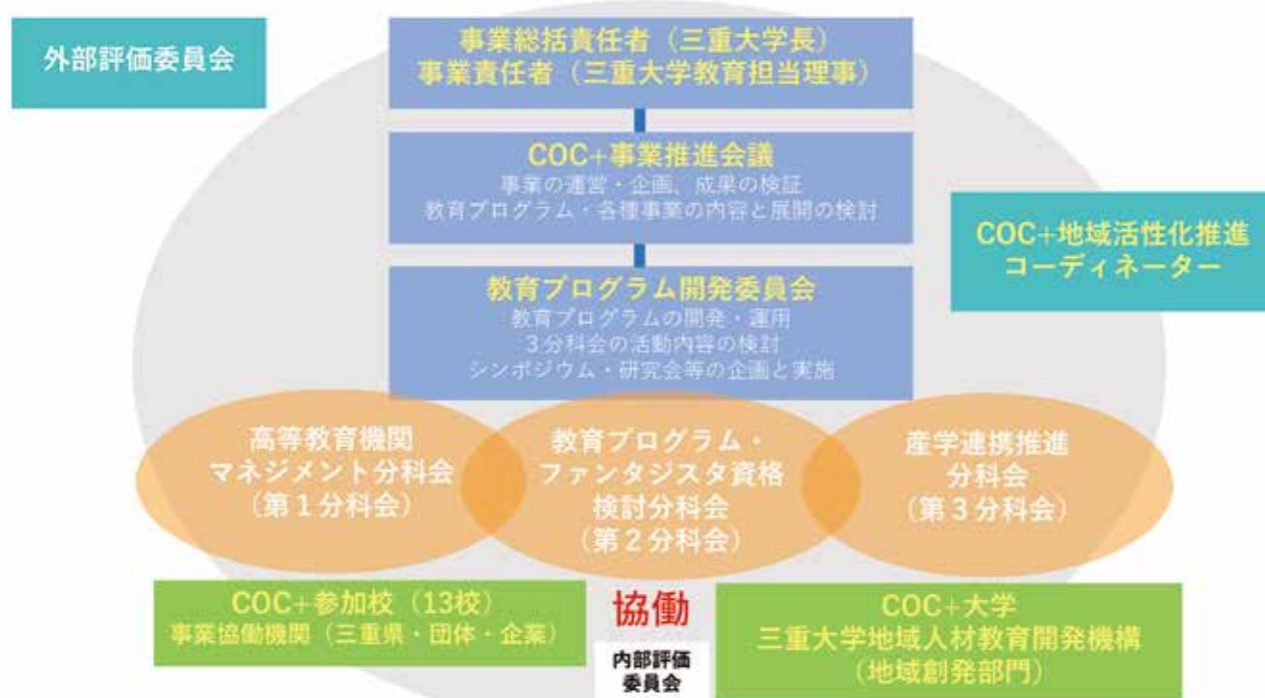
評価内容は下記のとおり

- I…計画を実施していない
- II…計画を十分には実施していない
- III…計画を十分に実施している
- IV…計画を上回って実施している

平成30年度の評価結果

	自己評価	外部評価委員会
総合評価	III	III
達成状況の要因分析と改善	III	III
運営		
① 事業実施体制の整備に関すること	IV	IV
② 事業の推進に関すること	IV	IV
教育		
① 教育プログラムの開発に関すること	IV	IV
② 教育プログラムの実施に関すること	IV	IV
地域連携・情報発信		
① 地域との連携に関すること	IV	IV
② 事業の情報発信に関すること	III	III
数値目標の達成状況	II	II

教育関係



補助期間終了後、高等教育コンソーシアムみえへ事業を統合。

三重創生ファンタジスタ資格

三重創生ファンタジスタ資格は、①ベーシック資格、②アドヴァンス資格、③エキスパート資格と、資格を3つに分類し、各高等教育機関で独自の教育プログラムを構築している。資格取得のための教育プログラムについては、第二分科会で対象科目のシラバスをチェックしながら各機関の特徴を活かしつつ、同等の内容になるよう協議しており、資格の構築を通じて高等教育機関の連携が強化された。本資格は、地域理解、課題解決力を高めるとともに県内企業等にファンタジスタ人材の養成を広く周知し、県内就職率アップに結びつけることを目的としている。

①ベーシック資格

●人材像

三重県の歴史・文化・産業等の特徴を理解し、地域が抱える課題に対して深く関心を持ち、主体的な活躍が期待できる。

●資格要件

三重県や地域を扱う授業6単位以上

●資格養成機関

四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿大学短期大学部、鈴鹿医療科学大学、四日市看護医療大学、三重県立看護大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校、三重短期大学、高田短期大学

●令和元年度資格発行(予定)数

235名(7高等教育機関、うち見込者数229名、令和元年12月31日現在)

②アドヴァンス資格

●人材像

ベーシックで得られた地域への深い知識に加えて、地域が抱える固有の課題(食と観光分野、次世代産業分野、医療・健康・福祉分野)に対して、他者と協働して解決策を提案できる。

●資格要件及び資格養成機関

(三重大学)

地域志向科目群4単位以上+地域実践交流科目群2単位以上+地域イノベーション学科目群2単位以上、計12単位以上

(四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学)

三重県や地域を扱う授業6単位以上+地域実践交流科目群(三重大学)に相当する授業6単位以上、計12単位以上

●令和元年度資格発行(予定)数

410名(5高等教育機関、うち見込者数408名、令和元年12月31日現在)

③エキスパート資格

●人材像

高度な社会人基礎力を備え、地域課題の解決に主導的に取り組み、地域イノベーションを創出することができる。

●資格要件及び資格養成機関

(三重大学)

アドヴァンス資格取得もしくは取得見込+地域活動等の主体的な学び+高等教育機関からの推薦+高等教育機関等における面接審査

●令和元年度資格発行(予定)数

3名(1高等教育機関、うち見込者数3名、令和元年12月31日現在)

アドヴァンス資格取得見込者の声

- 三重県の観光資源や食の資源について興味関心が深まったことはもちろん、この知識を県内外の人にも伝えたいという思いを持つことができるようになった。
- 三重県で育ち、長年三重県に住んでいるにも関わらず、三重県について知らないことがたくさんあると知った。
- 講義で深く三重県について学ぶことで、就職して社会人として社会に貢献するならば三重県民として貢献したいと強く思うようになり、三重県のがより好きになった。
- 選択した「医療・健康・福祉」の分野にとらわれず、今までに知らなかった三重県の土地や産業、歴史など様々な魅力について知ることができた。

地域の課題に応える三重創生ファンタジスタへ

エキスパート

高度な社会人基礎力を備え、地域課題の解決に主導的に取り組み、
地域イノベーションを創出することができる

アドヴァンス

ベーシックで得られた地域への深い知識に加えて、地域が抱える固有の課題
(食と観光分野、次世代産業分野、医療・健康・福祉分野)
に対して、他者と協働して解決策を提案することができる

ベーシック

三重県の歴史・文化・産業等の特徴を理解し、地域が抱える課題に対して深く関心を持ち、
主体的な活躍を期待できる

スタートアップセミナー

地域志向科目である「スタートアップセミナー」は、三重大学に進学した全ての新生が受講する必修科目であり、グループ・プロジェクトの実践を中心に進行していく授業である。大学での学びや社会で必要となる主体的な学びの態度と技術を身につけることを目的として、グループ毎にテーマを決めて課題を探究し、プレゼンテーションするといった一連の技法について学ぶものである。グループ・プロジェクトの共通目標は、「三重県や各市町村が抱える課題について、学問的な観点から解決するための実行可能な提案を行う」ことであり、三重創生ファンタジスタとしての基礎的な素養を身につけるために、重要な科目となっている。

今年度のスタートアップセミナーでは、鈴鹿サーキットにおける観光プログラムの提案や伊賀組みひものインバウンドツーリズム対応など、観光分野での意欲的なテーマ設定が多くあった。三重県出身者に限らず、他県から進学した学生でも認知度の高い観光コンテンツであり、議論しやすいという側面があったが、実際に事業者に対するヒアリングを進めていくと、すでに提案内容が実施されているといった、アイデアだけでは解決できない現実も学んだ。

このスタートアップセミナーを通じて学んだ課題探究に対する姿勢やプレゼンテーションの技法は、大学生活を通じて重要となる基礎能力であり、また社会人となっても継続して高めていく必要のある能力である。学生らにはスタートアップセミナーで得た学びを活かしながら、三重県をフィールドとして活躍することが期待される。

三重の歴史と文化

地域志向科目群として位置づけられている日本理解特殊講義「三重の歴史と文化」（前期授業）は、三重県の歴史や文化をより深く知ってもらうことを目的に開講しており、今年度は三重大学の1年生を中心に32名が履修した。三重県は、2000年の歴史を有する伊勢神宮を中心として、豊かな文化を育み、今なお、魅力的な地域資源を数多く残す。本授業は、三重県の歴史的事象、文化的特徴、先人の功績、地域資源を活用した観光展開等に注目し、各テーマに沿った事前学習（グループワーク）とゲスト講師による講義によって、三重県の歴史・文化を学ぶ授業である。

● 授業内容

本授業は、昨年度まで毎回ゲスト講師を招き講義を行っていたが、今年度からは学生がより主体的に、より深く三重の歴史・文化を学ぶために、ゲスト講師による授業の前にグループ毎の事前学習(調べ学習)を取り入れた。事前学習では、6グループがそれぞれ違うテーマを与えられ、限られた時間内で情報を収集し、グループの意見をまとめ、パワーポイントの報告資料を作成するという作業を行った。調べた内容は、翌週のゲスト講師の授業の冒頭で報告し、コメントをいただいた。例えば、第5回のグループワークでは、本居宣長を大きなテーマとし、6つのグループに次のような調査テーマが与えられた。

第1回	ガイドランス
第2回	三重の歴史の変遷と地理的特色
第3回	グループワーク (テーマ：地域振興とツーリズム)
第4回	伊勢志摩の魅力と新たな観光業のすがた
第5回	グループワーク(テーマ：本居宣長)
第6回	文化史的見地から見た近世の伊勢 (江戸初期以降に注目して)
第7回	グループワーク(テーマ：養殖真珠)
第8回	世界初の真珠養殖成功と御本本幸吉
第9回	グループワーク(テーマ：伊勢商人)
第10回	伊勢商人と三井高利
第11回	グループワーク(テーマ：忍者)
第12回	忍者の歴史と文化
第13回	グループワーク(テーマ：三重の食文化)
第14回	歴史学から見る三重の「食」
第15回	振り返り、期末レポート、授業アンケート

- ①「ふしぎ発見!本居宣長記念館見学ノート」の21ページを見て、特に、地名を囲う□、○、楕円の意味や街道に注目してこの地域の特性を説明してください。
- ②当時、津から江戸・大阪・京都との情報伝達速度、人や物の移動日数はどのくらいだったか考えてみてください。例えば江戸で大災害が起こった場合、津にはどのくらいで情報が届いていたでしょうか。行程や移動方法も含めて説明してください。
- ③伊勢は江戸や京都、大坂(阪)といった政治や経済、また文化の中心地から外れています。世の中の動きや、また人文科学研究の生命線とも言える文献や資料の入手が困難ではないかと想像されますが、なぜ宣長は最前線の研究ができたのでしょうか。中心と周縁という問題を、伊勢国で考えてみてください。
- ④伊勢と言えば神宮の存在を抜きに語ることは出来ません。神宮の存在が、当時の伊勢の人々(武士、商人、農民など)の生活に、あるいは学問にどのような影響を与えたかを弊害も含めて考えてください。
- ⑤神宮と並んで伊勢での大きな存在が、伊勢商人です。地域の中で、商人の活躍が顕著な場所、また時代を、特に文化面という見地から説明してください。
- ⑥本居宣長の『古事記伝』は現存最古の歴史書『古事記』の注釈書です。『古事記』は天武天皇の命令によって作成されたものですが、天皇はなぜ歴史書の編纂を命じたのでしょうか。またそれを宣長が35年という時間をかけて解読したのはなぜでしょうか。天武天皇の7世紀後半と宣長の生きた18世紀、またそれが評価されていく19世紀前半の国家情勢や周辺国との関係との類似性を考えながら説明してください。

学生らはこうしたテーマに毎回取り組み、時には難しい内容に四苦八苦しながらもグループで合意形成を得て、報告するよう作業を繰り返すことで、情報収集や情報の取捨選択、他者への伝え方などの力を伸ばしていった。また、調べた内容をゲスト講師にコメントいただくことで、自分たちの調べた内容が正しかったのかどうか、どのような視点が足りなかったのかなどを確認することができ、ゲスト講師との双方向のやり取りが生まれていた。



学生の感想(一部抜粋)

【第4回授業「伊勢志摩の魅力と新たな観光業のすがた」(講師:OZ 海島遊民くらぶ 江崎貴久氏)】

- あらかじめ調べていたことを発表し、ゲストの方に補足説明していただいたことで、今回のテーマである三重の観光について理解が深まりました。また、プレゼンを通して“着地型観光”や“エコツーリズム”といった用語を知ることが出来ました。事前に学んだ着地型観光、エコツーリズムを具体的に実践している事例を見られたのでよかったです。(抜粋)
- 町の雰囲気が均一化していく中で、昭和の雰囲気が残っている鳥羽の離島に行ってみたいと思った。地域に住んでいる人たちが「この地域は良いところだ」と思って投資していくことでお金がまわって活性化していくこと、観光に来た人たちも良い気分楽しくなるのは素敵なことだと思った。観光プランの失敗から自分の魅力を見つけていったのはすごいと思った。(抜粋)

【第6回授業「文化史的見地から見た近世の伊勢(江戸初期以降に注目して)」

(講師:本居宣長記念館館長 吉田悦之氏)】

- 本居宣長という学者を通して伊勢や松阪といった地域の特性、そこで活躍した商人の姿が見れた。学者にとって伊勢という環境のメリット、デメリットの話は、現在の三重で学ぶ私たちにも通じる点があるように感じました。田舎でありながら全国各地の情報があつまる伊勢という特殊な地域だからこそ、本居宣長の考えが世界の中の日本というものを捉えることができたという話はとても興味深かったです。(抜粋)
- 伊勢は江戸や京都から離れていて、どちらかといえば田舎に分類されるが、伊勢参りで人の行き来があったので情報は多く入ってきた。これが学問にじっくり取り組める環境を作ったというのはとても興味深かった。(抜粋)

【第10回授業「忍者の歴史と文化」(講師:三重大学 山田雄司教授)】

- 忍者について学習する機会がなかったためか、自分の持っていたイメージとはかなり違っていた。忍者は武士と同じように戦闘のプロだと思っていたが、現実世界のスパイであり屈強な精神が必要であるということを理解した。(抜粋)
- 1忍者は知恵や想像力、記憶力が大事で、忍者とはすごい職業だと思った。肉体的な強さも大事でいろいろな面で優れている必要があることをしった。また、優れた忍者は名前を残さないと聞き、かっこいいと思った。この授業を機会に伊賀を訪れて忍者についてもっと知りたいと思った。(抜粋)

食と観光実践

地域実践交流科目群として位置づけられている三重学「食と観光実践」を、東紀州地域を現地学習の場として実施した。三重大学22名、四日市大学4名、皇學館大学3名、鈴鹿大学3名の計32名が参加し、各大学の教員6名とともに熊野や尾鷲の現状について理解を深めた。

● 事前学習

事前学習1回目は、オリエンテーションおよび「四日市とんてき」を題材としたご当地グルメによるまちおこしの事例紹介、また課題解決に向けたフレームワークを体系的に学ぶためのワークショップを実施した。2回目の事前学習では、三重県総合博物館MieMuにおいて、太田光俊学芸員より三重県の地理・歴史的な成り立ちや東紀州地域を中心とした風習文化の展示を見学しながら解説いただいた他、講義およびワークショップを実施した。



● 現地学習1日目

現地学習の1日目は、熊野市山間部(旧紀和町)の紀和鉱山跡地にある、トロッコ列車と紀和鉱山資料館を訪問した。トロッコ列車は、瀬流荘から湯ノ口温泉までを結んでおり、鉱山に使われていたトロッコ線路と気動車を再利用している。学生らはトロッコ列車に乗り込み、片道15分ほどの坑道を通して湯ノ口温泉駅に到着し、東紀州地域の名物であるさんま寿司やめはり寿司が入った熊野古道弁当を昼食にいただいた。



紀和鉱山資料館では、奈良の大仏建立の銅を掘っていた時代から近代に至るまでの鉱山の歴史を学ぶとともに、実際に鉱山における暮らしを再現した展示を見ながら、学芸員から説明を受けた。紀和鉱山は、鉱毒問題などを一切起こさなかった環境保全に配慮した先進的な鉱山であり、その考え方が現在の湯ノ口温泉などをはじめとした観光利用にも生かされていることを学んだ。その後、丸山千枚田を見学し、この地域を形成していった歴史やそれによって培われた文化、現代に伝わる慣習などを学んだ。

宿舎に到着すると、グループワークを実施し、各グループが事前に調べてきた東紀州の各地域の歴史や文化について発表した。紀和鉱山、丸山千枚田、金山町、木本町、梶賀町、二木島町の各地域における食文化の形成や独自の伝統などをグループ間で共有することで、フィールドワークの対象となる全地域の情報を俯瞰できるようになった。その後のワークショップでは、今後2日間とくに注目する地域資源や課題をグループ毎に定めて、その活用法や解決策を提案するための仮説づくりを進めた。

● 現地学習2・3日目

2日目は沿岸部を中心に移動し、梶賀町で「梶賀のあぶり」を特産品として製造販売する中川社長のお話を伺った。地魚であるサバやブリ、カツオなどを桜や檜といった薪で炙ることで作られる伝統食の燻製を、地域住民とともに商品化し流通させ、販路開拓を進める中川社長のライフスタイルに刺激を受けた学生も多かった。



昼食には、地場の定置網で朝に獲れた魚をいただき、午後からは二木島町・甫母町において実際に漁船観光・定置網漁を体験しました。桝ヶ崎や笹野島など、熊野灘の荒波に削られた景観を目の当たりにするとともに、漁業者へのインタビューと定置網漁を体験することで、海とともに暮らす生きがいや大変さ、醍醐味を実感した。

3日目はこれら山と海の体験に基づき、1日目に設定した仮説をグループ毎に検証していくワークショップを熊野古道センターで実施しました。机上で考えていたことと、実際に山や海に出て地域住民とコミュニケーションを取って得た情報がどのくらいギャップがあるか、また自分たちの視点でこれらの地域資源をどのように活用すべきかを取りまとめた。

● 事後学習

事後学習においては、各グループが現地学習を踏まえた地域観光振興への提案をまとめ、発表した。それぞれ、事前学習の際に持っていた仮説が現地学習によって明確となり、さらに課題解決に向けて各グループで話し合った成果が取りまとめられていた。現場視点での考え方を実践したことで、三重創生ファンタジスタとして今後さらなる研鑽を積んでいってもらいたいと考えている。



学生の感想（一部抜粋）

- ネットには掲載されていないような、直接地元の人に聞くことでしか得られない情報を得て、インタビューの大切さを学んだ。漁業に関わっている人に仕事や観光のことについて尋ねた。
- 三日間広く多くの情報が、私たちの目から入ってきたり、地元の方や観光協会の会長さんにインタビューを通して入ってきた。どの情報も新しいことで大事なことだったが、私たちのグループが初めに設定したテーマのために役立つことを考え、仕分けしつつ聞くことができた。
- 現地学習で積極的に質問した事については、他の班が入手していないような漁師さんの本音や、私たちが間違った固定概念を持っていることなどを知ることができ、とても貴重な意見を知ることができました。またグループワークでは、リーダーとなって引っ張って行くことを意識しましたが、それが適切であったかはわかりません。しかし、最終発表までなんとかやりきることができたとし、他のメンバーから色々やってくれてありがとうと言ってもらえ嬉しく思いました。
- 近くにいない人と協力して発表をするため、効率良く計画を進めていく工夫をする方法を身につけました。実際社会に出た時は近くにいない人とプロジェクトを進めていくと思われるので、とても勉強になりました。また、実際地域を見たり、地元の人に聞いたりして、自ら課題を見つけるということの難しさを感じました。この授業では、以上のように課題を見つけ解決策を考え発表するというプロジェクトの最初から最後までを行うことで、これからの学校生活や社会に役立つ能力を身につけられたと思います。
- 二泊三日の現地学習でたくさんの能力が身についたと思います。例えば、事前に質問リストを作成しつつ、深い話がきけそうならば臨機応変に対応するなどのスキルが身につきました。
- 観光を盛り上げたい人や、今のままで十分という人など、様々な考え方があるのだと分かった。
- 三重県に対して親しみが深まる。他大学の学生と交流ができる。

医療・健康・福祉実践

地域実践交流科目群として位置づけられている日本理解特殊講義「医療・健康・福祉実践」を、志摩市民病院と間崎島で実施しました。三重大学17名、鈴鹿医療科学大学15名の計32名が参加し、各大学の教員4名とともに志摩市の地域、離島の医療における現状について課題発見や問題解決に取り組んだ。



● 事前学習

事前学習では、医療・健康・福祉についての基礎知識を学ぶ授業を実施し、グループごとにコミュニケーション手法やインタビューの進め方、課題の洗い出し方法までグループワークで意見を出し合った。また、県外出身者も多いことから、三重県と志摩市の地理的な背景や歴史をはじめ、間崎島のこれまでの生活の推移と現状のデータなどを学んだ。

また、ビッグデータを用いた予防医療について、医用工学研究所代表取締役の北岡義国氏にゲストスピーカーとしてご講演いただいた。



● 合宿実習1日目

1日目は志摩市民病院を訪問し、地方の総合医療を担う病院の様々な部署を見学しながら学び、志摩市の抱える医療についての課題を考えるグループワークを行った。参加した学生は積極的に自分の意見を述べ、活発にディスカッションを行っていた。



● 合宿実習2・3日目

2日目および3日目は、間崎島に移動し、離島が抱える問題について、住民へのインタビューを通して考えた。その後、間崎島の住民と交流しながら昼食をとった。実際に昔から離島に住んでいる方々の話を聞き、さらに島内をガイドしてもらいながら町歩きをすることで、想像もしなかった問題や課題が浮かび上がり、どのようにして解決に導いていくのかを、グループごとに話し合っていた。

中には数十年前の写真資料を見ながら当時の話を聞いていたグループや、島の歴史が綴られている書物を開いてデータを集めたりしているグループもいた。インタビュー内容もあらかじめ用意しており、スムーズに必要な情報を引き出す工夫もしていた。



● 事後学習

9月13日(金)に、現地学習で得た経験や知識から、履修生が自ら考えた問題解決方法の発表を事後学習として行った。履修した学生たちは、志摩市の離島である間崎島で体験したことや住民と交流しインタビューして得た情報から、自分たちの考えをまとめて発表した。「離島の存続を考えるよりは、今いる人たちが幸せに終われるようにすることが大事」と主張する学生や「魅力をうまく伝えて移住者を呼び込もう」と考える学生、「先進的な医療を駆使すれば、ある程度のQOLを保つことができる」と結論を出した学生など、それぞれが発表を行った。発表内容についても、学生同士で鋭い質問の投げかけをして活発に議論した。全員が質問に対して自分たちの意見を論理的に返答しており、授業を通して聞く力や伝える力が養えたことがうかがえた。



実地での授業は非常に好評で、履修した学生からは「履修してよかった」「普通には絶対に体験できない事ができた」「知らない三重県の魅力がまだまだたくさんあると気づけた」などの声があった。



令和元年10月5日(土)には、間崎島でも事後学習の発表を実施した。学んだ成果を現地に還元するため、学生たちは再び志摩市間崎島へ足を運んだ。

自分たちが課題を発見し、その解決策についてグループ内で話し合った内容を間崎島の住民に向けて再度発表した。発表内容については学生だけではなく住民とも活発な質疑応答ができ、現地で生活しているからこそ見えてくる視点や住民全体の意識といった面からの指摘もあった。

住民からも、「このような交流は大切で、是非続けていきたい」といった言葉をいただいた。最後は船が見えなくなるまで岸で手を振って見送っていただいた。

学生の感想(一部抜粋)

- とにかく思いついたことを質問していき、相手の話には耳を傾けてうなずいて聞いていると島民の方もとても満足そうにしておられました。自分から話しかけていくと島民の方もとても話してくださいました。様々なお話を伺うことができたため、間崎島の現状であったり、良いところ、改善すべきところ、などを思いつくことができました。お話を伺うにあたって、ほとんどの住民の方が今の島の生活に満足しておられ、健康に幸せそうに生きていることが伺えました。しかし、一部の住民が不便に思っていることを解決していくことが今後重要になってくるのではないかと考えます。
- 今まで知らなかったことを体験して学べる。1人では考えるのが難しい内容もみんなと一緒に考えることができるし、新たな意見を取り入れることができる。
- 僻地医療について病院や離島を実際に尋ねてその問題点を肌で感じて解決策を深く考える機会が得られる。また、テーマは僻地医療だが、実際に他の医療の分野でも参考になることがたくさん学べる。スライド発表や質疑応答などの力もつき、よい経験になる。
- 地域に出て、フィールドワークを行うことで、大学の講義では得られない新鮮な体験ができました。

地域発見型インターン

地域実践交流科目群として位置づけられている現代社会理解実践「地域発見型インターン」は、今年度は「防災」をテーマに地域と企業、行政を結び付ける教育型インターンシップのカリキュラムとして開講した。三重大学 22 名、四日市大学 3 名の計 25 名が参加し、三重大学および四日市大学の教員が連携して実施した。

● 事前学習

今年度のテーマである防災について、1959 年の伊勢湾台風、2011 年の東日本大震災を事例とした被害状況の概要説明、災害対策に対する自助・共助・公助の進め方、南海トラフ巨大地震を想定したハザードマップの読み込みと自宅や大学周辺の被害予測といった一連の取り組みを概観した。また、避難所運営シミュレーションゲーム HUG を実際にやってみて、緊急時対応の難しさを学んだ。



● 現地学習

1日目は伊勢市防災センターおよびマサグループ本社を訪問した。伊勢市防災センターでは、消防署機能と防災に関する広報学習機能が複合した施設で、豪雨や火災など様々な状況をシミュレーションした研修が可能となっている。また災害備蓄の現状を見学し、その重要性を知った。

マサグループ本社は食品メーカーとして、全国に繋がるサプライチェーンの維持と生産体制の保全、そして従業員の安全確保に対して計画策定を進めています。今回の学生を交えた意見交換においても、消費者視点と地域目線でのアイデアを求められる等、活発な議論ができた。



2日目は津市役所危機管理部防災室および、百五銀行を訪問した。津市は10市町村が合併した広大な自治体であり、海から山まで様々なロケーションを想定した災害対策が重要となる。市役所だけではなく各自治会での防災の取り組みを支援することで、自助共助のネットワークを強化している活動が印象的だった。

百五銀行は地方金融機関の立場から地場の企業にBCPを推奨する取り組みを進めており、全国にも珍しい大規模地震を想定した金融商品を組成するなど独自の対策も行っている。グループワークではBCP（事業継続計画）導入を推進する百五銀行チームと、BCPをよく分からず導入したくない中小企業チームに分かれてディベートを行ない、メリット・デメリットを比較することで本質的な理解ができるようになった。



3日目は鈴鹿サーキットおよびICDAホールディングスを訪問し、大規模イベント時の防災・テロ対策や自動車を中心としたインフラ保全のBCPについて学んだ。鈴鹿サーキットはF1レース時には10万人もの観客が押し寄せ、通常時でも3万人程度が訪れる場所であり、サーキットだけではなく遊園地やホテル・レストランといった複合施設ならではの課題があると学んだ。

ICDAホールディングスでは新本社を建設するに当たって、地域防災の拠点となるとともに、ペーパードライバーなどへの運転講習を実施することで交通という公共的なインフラを守る立場を明確にしている。新たに社外取締役として鈴鹿消防署長を務めた中西氏を迎え、BCPを経営計画に盛り込むことで取引先や地域住民の信頼を得るといった話が印象的だった。また、近年多発する大規模災害に対しては自動車を寄贈するなど、機動的な支援も行っているとのことだった。



4日目は多気町役場および万協製菓を訪問した。多気町は高速のジャンクションがある交通の要衝として、南海トラフ地震等の沿岸部が被災した際には後方支援拠点となる地域である。東日本大震災時の遠野市や熊本地震時の福岡市など、後方支援拠点としての機能を防災計画に盛り込んだ自治体の事例を参考として、学生たちが調査し提案した。

万協製菓では、三重県に移転して第二創業したきっかけが阪神大震災だったという経緯もあり、従業員を守るための導線の確保や製菓会社として人の生命を守るための生産体制維持のBCPについてお話を伺った。学生たちからはホワイト企業だといった感想が出るほど、従業員を第一に考えた数多くの施策が印象的だった。



● 事後学習

事後学習においては、各自が防災をいかに地域住民に普及啓発していくかの提案をまとめ、発表した。現地学習を通じて、各地域や団体、企業における防災対策の違いや意識の差を感じ取ることができ、今後の就職や地域活動を進めていく上での参考となった等の意見が聞かれた。

学生の感想(一部抜粋)

- 災害が起こった時にどう対応すべきか、何が最善かなどを考えることをするようになりました。そしてそれを、友達や地域の住民などに呼びかけ、将来起こるであろう南海トラフ巨大地震の対策をみんなですべて被害をより小さくしていけたらと思う。
- 企業で学んだことを自分なりにまとめて後日発表したことで、ただ学んで終わりではなく、復習を行なったことで重要なところはどんなところなのかを理解できたと思う。
- マスヤグループ本社に訪れて、取るべき防災対策について話し合うワークショップをした際に、マスヤグループの現状を見た上で、今後どのような策をとるとよいかについて、グループで相談して発表しました。提案にあたり、午前中に訪れた、伊勢市防災センターで知った備蓄状況や、事前学習で知った好ましい備蓄内容が大いに参考になりました。これらを通し前述の資質を向上させられたと思います。
- 津市役所さんや百五銀行さんの話を伺い、地域住民と連携した避難計画を立てていることを知り、何事もそれぞれの地域の特徴に合ったようにすべきだと行動で意識できるようになった。

自然環境リテラシー学

地域実践交流科目群に位置づけられている「自然環境リテラシー学」は、県内の自然を多くの人に体験してもらう「三重まるごと自然体験構想」の一環として、自然を体験できるプログラムの開発や魅力を伝える人材の養成を目的に、県と協働で開設された。受講者として三重大学から48名、スタッフとして昨年度受講者を中心に12名が参加し、自然環境を体系的に理解するとともに、海や山での体験を通じて、安全管理に関する知識や技能を修得した。

8月26～30日(尾鷲)、9月2～6日(南伊勢)の2回に分けて実施された合宿実習では、サイクリング、SUP、シーカヤックといったアクティビティの体験、およびインストラクターとしての安全講習の実施や自然環境を解説するための実践的な知識修得を図った。実際に、無人島に行ってテントで寝泊まりする、転覆したシーカヤックを救助するといった体験を通じて、自然に対する敬意と怖れを持ちながら親しむ感覚を養っていった。

また、各地において地域住民と積極的に交流し、事後学習として三重県総合博物館で展示発表会を実施することで、この授業で学んだ内容を広く知ってもらう機会を設けた。学生たちも自らの感覚知を言語化し、他者に伝えるためのアウトプットを考えることを通じて共有知にしていくプロセスを経験することで、地域資源を活用するリーダーシップの素養を得ることができた。



三重の産業

地域志向科目群として位置づけられている現代社会理解特殊講義「三重の産業」(後期授業)は、三重県の産業について、学生がより深い知識を身に着けることを目的に開講しており、今年度は三重大学の1年生を中心に工学部、教育学部、人文学部から合計32名が履修した。三重県は、ものづくりの世界センターである東海圏の一角を占める産業拠点である。温暖な気候で伊勢湾に面することから、農林水産業が発展し、豊かな食文化も育まれてきた。また、三重県では全国の傾向と同様に高齢化が進展し、労働力不足を解消すべく、AI等を活用したビジネス戦略も進んでいる。三重県の経済は多様な産業から構成され、各産業が相互に関係を持ちながら発展している。

本授業においては、科学技術の発展や国際化、健康志向、高齢化等の時代の趨勢等を踏まえ、三重の経済を支える産業に着目し、その歴史的発展や現状、課題を客観的なデータを用いながら学術と実務の両面から学修するものである。

● 授業内容

本授業は、昨年度まで毎回ゲスト講師を招き講義を行っていたが、今年度からは学生がより主体的に、より深く三重の産業を学ぶために、ゲスト講師による授業の前もしくは後にグループ毎の事前事後学習(調べ学習)を取り入れた。事前学習では、5グループがそれぞれ違うテーマを与えられ、限られた時間内で情報を収集し、グループの意見をまとめ、パワーポイントの報告資料を作成した。

第9回の「イノベーションで守る伝統産業」では、明治時代に創業した二軒茶屋餅角屋本店の代表取締役・鈴木成宗氏にゲストスピーカーとしてお越しいただいた。同店で製造するクラフトビールは世界一を獲得しており、折しも鈴木氏著『発酵野郎! - 世界一のビールを野生酵母でつくる -』がリリースされて間もないこともあったため、その本を読んだ学生が興味を持ち聴講に来るなど、三重県で輝く人材に興味を持つ学生も現れた。

受講した学生は、「グループワークを通して他学部の履修生とも交流でき、まったく知らない他分野について学べてとても面白い」と感想を述べている。

第1回	ガイダンス
第2回	航空機産業の取組みと展望
第3回	グループワーク(テーマ:航空宇宙産業)
第4回	グループワーク(テーマ:自動車産業)
第5回	三重県の自動車産業の構造変化とグローバル化
第6回	三重県発、世界をリードする農業技術
第7回	グループワーク(テーマ:三重県の農産物)
第8回	グループワーク(テーマ:クラフトビール)
第9回	イノベーションで守る伝統産業
第10回	三重県経済の位置づけと製造業の特色
第11回	グループワーク(テーマ:三重県の製造業)
第12回	グループワーク(テーマ:IoTとAI)
第13回	グループワーク(テーマ:三重県の金融)
第14回	地域の発展を支える地域金融機関の役割
第15回	老舗×ビッグデータの経営革新



PBL型後期集中講義(次世代産業実践、三重の地場産業)

● 次世代産業実践

地域実践交流科目として位置づけられている現代社会理解実践「次世代産業実践」は、三重県の主要産業に位置付けられる航空宇宙産業を中心に、工学的内容のみならず化学素材開発や生物資源活用といった異分野からのイノベーションを生み出す考え方の素養を身に着ける内容となっている。昨今のAIやロボティクス、パーソナルファブリケーションといった要素を取り入れるとともに、実際に製造現場や研究機関に足を運び、最先端の技術を社会実装する働き方について社会人の方々と意見交換しながら学ぶ内容である。

12月14日に実施した事前学習においては、人類が月に到達して50年となるアポロ計画を取り上げ、イノベーションに関する捉え方を体系的に学ぶとともに、SDGsの17のゴールに対するイノベーションの経緯について事前レポートとして論じた。

2月18日～20日の現地学習では、2泊3日の合宿形式で実際に航空機のデザインを行い、レーザーカッターで加工するといった実証実験の要素を取り入れ、またドローンを飛ばしてみる体験をすることで空を飛ぶことが個人にできる分野になりつつある近未来を学ぶ。また、実際に飛行機の部品を製造する大起産業木曾岬工場やミドリムシからジェット燃料を製造する研究開発を行っているユウグレナ藻類エネルギー研究所を見学することを予定している。

● 三重の地場産業

地域イノベーション学科目として位置づけられている現代社会理解特殊講義「三重の地場産業」は、三重県内の地場産業に焦点をあて、個々の地場産業の実態に詳しいゲストスピーカーの講義と現場見学を通じて、地場産業への理解を深め、各産業が抱える課題の発見と、それへの実現可能な解決策を提案する能力を身に付ける内容となっている。三重県には特定産業の中小企業が集積することで産地を形成し、地域独自の製品を広く国内、海外に生産・販売している地場産業がある。地場産業は地域の歴史、文化を反映させながら、地域を代表する製品を創造し、地域内に一つの経済循環をもたらすことで、地域経済の発展に寄与してきた。しかしながら、近年は少子高齢化を背景に人口減少が進んでいることで職人不足等の課題が生じ、産地衰退が顕著である。

本年度の授業では三重県の地場産業の中でも「萬古焼」「大矢知そうめん」「伊勢型紙」を取り上げ、工場見学に向かう予定である。見学後は、事後学習として各グループに分かれ、それぞれが現場で得た知識と調査して分かった情報を分析し、プレゼンテーションとして自分たちの考えをアウトプットすることで、アイデアや提案を人に伝えることを目標に授業に取り組んでもらう。各々のプレゼンテーションの後には専門家からの講評もいただく予定で、三重の地場産業について、より理解を深めることが出来る内容となっている。

地域志向型ルーブリック

昨年度に引き続き今年度も、三重創生ファンタジスタオリジナル科目の「食と観光実践」、「医療・健康・福祉実践」、「地域発見型インターン」、「次世代産業実践」、「三重の地場産業」においてルーブリックによる学修成果の可視化に取り組んだ。

● ルーブリックの内容

本年度も、昨年度作成した「地域志向型ルーブリック」を使用し、地域課題の解決にかかわる能力5つに焦点を当て学修効果を測定した。

地域課題の解決に関する能力は、次の5つの指標を設定し、4段階の評価尺度(レベル1～レベル4)を設けた。

- ① 地域課題の解決のため、情報収集し、分析する力
- ② 地域課題を解決する力
- ③ 修得した知識・知見を活用する力
- ④ グループをひっぱる力
- ⑤ 他者と協働する力

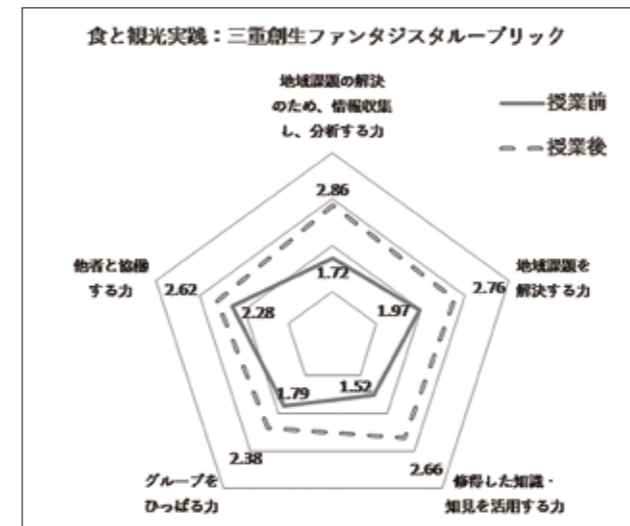
評価は、自己評価を採用し、授業の実施前後で学生自身が現在の自分の状況に当てはまるものに○を付けることとした。

【食と観光実践】

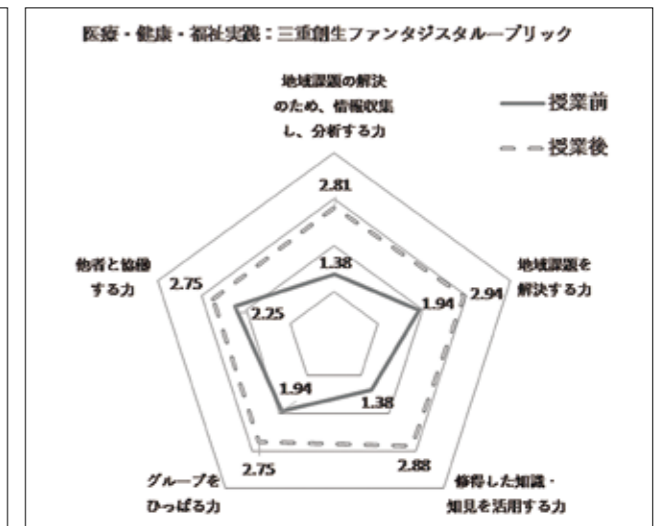
全項目のポイントが上昇しており、特に「地域課題の解決のため、情報収集し、分析する力」が大きく伸びている。本授業では、地域の漁業関係者や観光産業従事者等に何度もヒアリングする機会があったことに加えて、最終的な報告のためにグループ内で役割分担し、情報を収集、分析してきたことが効果として表れたのではないかと推察できる。

【医療・健康・福祉実践】

本授業でも全項目で伸びが見られ、特に「修得した知識・知見を活用する力」において大幅な上昇が確認できた。本授業は、離島の生活や医療について、間崎島をフィールドとして学ぶものであったが、その際、離島の住民とのコミュニケーションを重視した。そのため、地域が抱える課題や住民の思いや望ましい地域の姿などを適切に把握できたことが、この結果に結びついたと考えられる。



食と観光実践の結果 (n=29)



医療・健康・福祉実践の結果 (n=16)

【三重創生ファンタジスタ ルーブリック】 下記の項目について、あなたの現在の能力の状態にあてはまる箇所(レベル)に○を付けてください。

	入門(レベル1)	もう少し(レベル2)	良い(レベル3)	とても良い(レベル4)
1. 地域課題の解決のため、情報収集し、分析する力	インターネットや文献等を検索し、地域課題解決のために、必要な情報を収集することができる	地域課題解決のために、関係者にヒアリング(聞き取り調査)を行うことができる	課題解決のために、様々な情報源から収集した情報を吟味して取捨選択することができる	取捨選択した情報を課題解決の目的に合わせて論理的に分析することができる
2. 地域課題を解決する力	地域の現状を把握することができる	現状とあるべき姿のギャップを明らかにすることができる	現状とあるべき姿のギャップを明らかにした上で、課題を設定することができる	解決策を現実的(具体的)に計画することができる
3. 修得した知識・知見を活用する力	これまでに修得した知識・知見を地域の課題解決に活かしたいと思う	これまでに修得した知識・知見を地域の課題解決にどのように活用するか説明できる	地域課題に対してどのようなアプローチが有効か理解することができる	これまでに修得した知識・知見を地域の課題の解決に活用することができる
4. グループをひっぱる力	グループ活動において、自ら意欲的に取り組むことができる	グループ活動において、自らグループ活動の目的を設定することができる	メンバーとの議論において、自らの主張を出し、かつメンバーの様々な意見を引き出すことができる	グループのメンバーの様々な対立点(コンフリクト)を解消し、目的に合わせた意思決定をすることができる
5. 他者と協働する力	グループにおいて目的を有した協働活動を行うことができる	グループ活動において目的をよく理解し、目的に合わせて段取りすることができる	他者の考えや予定等を調整し、協働作業を前に進めることができる	目的に向かって協働作業に取り組み、最終的な成果を実現することができる

● ルーブリックの結果

評価尺度のレベル1～4を順にポイント化し、授業前後で比較した結果、以下のような結果が得られた。(紙幅の都合により、「食と観光実践」及び「医療・健康・福祉実践」の2科目を示す)

教育プログラムの成果

これまでCOC+において取り組んできた教育プログラムが、学生にどのように影響を与えてきたかについて、三重大学の修学達成度調査および県内就職者数の結果から分析した。

● 修学達成度調査における地域に関する質問項目

修学達成度調査は毎年、全学生を対象に実施されており、今回は地域に関する質問を中心に分析した。地域に関する質問は平成30年度より設けられており、質問項目は以下の通りである。

質問1	本学が「地域貢献大学」として地方創生に資する教育・研究・社会貢献活動を進めていることを知っている
質問2	三重県の歴史文化、自然環境、産業経済等について興味や関心を持っている
質問3	三重県に関する知識について、理解が深まっている
質問4	三重県に親しみを持っている
質問5	三重県の文化や魅力を伝えることができる
質問6	授業や課外活動などで地域貢献活動等、地域と関わる活動に参加したことがある
回答肢	1. 全くそう思わない、2. そう思わない、3. そう思う、4. 非常にそう思う

● 結果

表1は、上記質問の平成30年度 (H30) と令和元年度 (R1) の結果であり、数値が高いほど肯定的であることを示している (満点4.0)。これによると、全体では、H30 よりR1の方が、数値が高くなっており、地域に関心を向けるための教育プログラムが効果的に作用していることが推察できる。また、COC+オリジナル授業・イベントの参加者は、非参加者と比べて数値が高く、COC+関連のイベントに参加することで、地域に対する意識が高まったことがうかがえる。

	全体		学年別								COC+授業、イベント (R1)	
			1年		2年		3年		4年		参加者	非参加者
	H30	R1	H30	R1	H30	R1	H30	R1	H30	R1		
回答数	3,636	1,726	577	719	1,168	353	1,105	351	756	248	77	1,649
質問1	2.84	2.95	2.97	3.03	2.86	2.92	2.80	2.87	2.77	2.87	3.10	2.94
質問2	2.67	2.70	2.68	2.74	2.70	2.68	2.62	2.65	2.70	2.74	3.04	2.69
質問3	2.69	2.71	2.70	2.76	2.71	2.71	2.64	2.68	2.71	2.69	3.01	2.70
質問4	2.90	2.92	2.91	2.92	2.90	2.91	2.85	2.96	2.96	2.92	3.13	2.91
質問5	2.61	2.62	2.53	2.57	2.62	2.64	2.58	2.65	2.71	2.67	2.88	2.60
質問6	2.52	2.55	2.41	2.52	2.53	2.55	2.52	2.59	2.58	2.62	3.18	2.52

また、県内就職者数および県内インターシップの動向を見てみると、三重大学・COC+参加校の県内就職者数ならびに三重大学の県内インターシップ数のどちらも増加傾向で推移しており、本教育プログラムの成果が徐々に実を結んできたのではないかと推察できる。

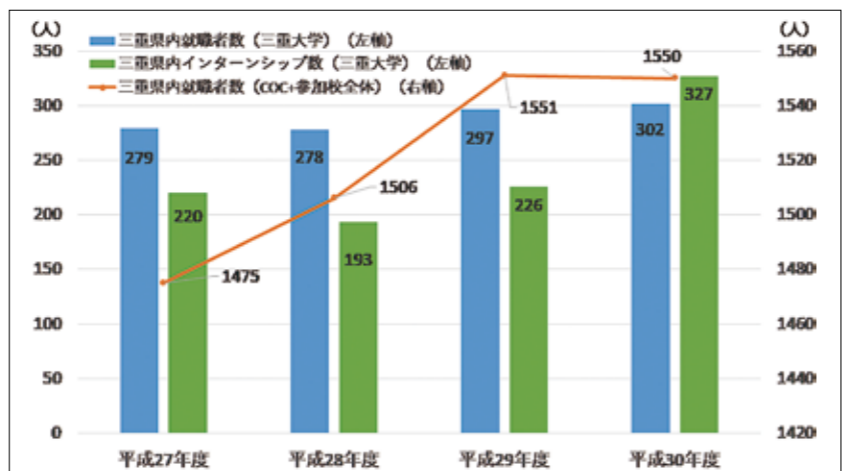


図1 県内就職者数および県内インターシップ数の推移

地域連携・情報発信

COC+ シンポジウム 「三重創生ファンタジスタ養成事業の総括と展望」

令和元年11月23日(土)、三重大学講堂(三翠ホール)にてCOC+事業の集大成となるシンポジウム「三重創生ファンタジスタ養成事業の総括と展望」が開催された。当日は秋晴れに恵まれ、153名の大学関係者、学生、企業関係者らに参加いただいた。シンポジウムは、「第一部 三重大学COC+5年間の歩み～オール三重体制による三重創生ファンタジスタの養成～」、「第二部 パネルディスカッション 三重創生ファンタジスタ これまでとこれから」、「第三部 事例発表 学生が地域から学んだこと」および学生によるポスターセッションで構成され、これまでのCOC+の取り組みや成果が報告された。

● 開会挨拶

開会に際しては、三重大学 駒田美弘学長より、高等教育機関・企業が連携し、地域を活性化させる人材の育成が急務であること、また、三重県 副知事・渡邊信一郎氏からは、若者の流出が深刻ななか、県内の高等教育機関が高等教育コンソーシアムみえを組織し、若者を定着させるためにさまざまな取り組みを実施していることを評価され、今後も更なる教育の充実を期待する、という挨拶をいただいた。



● 第一部

三重大学COC+5年間の歩み～オール三重体制による三重創生ファンタジスタの養成～

第一部では、三重大学 富樫健二副学長(教育・COC+担当)より、5年間のCOC+事業の取り組みと成果が報告された。COC+事業の目的や運営体制、数値目標、三重創生ファンタジスタ資格、オリジナル授業、イベント、事業評価等について説明があった。



● 第二部 パネルディスカッション

「三重創生ファンタジスタ これまでとこれから」

第二部は、三重県戦略企画部 副部長兼 ひとづくり政策総括監・横田浩一氏、中外医薬生産株式会社 取締役管理本部長・岡森久剛氏、岐阜大学教育学部 附属学習協創開発研究センター教授(COC+外部評価委員会委員長)・加藤直樹氏、皇學館大学文学部教授 教育開発センター長・齋藤平氏、三重大学 山本俊彦理事(教育担当)をパネリストとして迎え、三重大学 雲井純地域活性化推進コーディネーターをファシリテーターとして、「三重創生ファンタジスタ これまでとこれから」と題したパネルディスカッションが行われた。

自己紹介を兼ねたパネラーの挨拶では、COC+の取り組みにそれぞれコメントをいただいた。まず、COC+事業の外部評価委員である加藤直樹氏からは、駒田学長が企業・自治体訪問等を行い、リーダーとして事業を引っ張っていることを高く評価いただき、またゼロベースから授業カリキュラムを組み立ててきたことや高等教育機関間で緊密な連携が行われてきたこと、三重創生ファンタジスタクラブの学生が会議においてこれからの生き方を語ってくれたことなどが印象に残った、とお話があり、本事業

の大きな成果であると評価いただいた。

続いて、事業協働機関で第三分科会の委員でもある中外医薬生産株式会社の岡森久剛氏からは、COC+事業の認知度が上昇し、学生らが三重創生ファンタジスタ資格を取得するために行動範囲が広がってきたこと、企業の立場として県内の若者定着のために企業の魅力発信が責務であることなどをコメントいただいた。

三重県の横田浩一氏からは、三重県の人口の転出超過が続く、県として若者の県内定着に取り組んでいること、また産学官民のオール三重の体制がCOC+の大きな特徴であることといったコメントをいただき、三重創生ファンタジスタ資格を持っている学生が就職の際に、非常に有望な人材として成長していることなどをご紹介いただいた。

皇學館大学の齋藤平氏からは、第二分科会の取り組み内容をご紹介いただき、県内の高等教育機関がシラバスを持ち寄り、地域を学ぶ授業を増やすために努力してきたことやCOC+オリジナル科目が大学を越えて教員が連携し、より良い授業を作り上げてきたこと、キャリア教育としてJobキャラバンなどを実施してきたこととお話いただいた。一方で、残された課題としてCOC+事業や高等教育コンソーシアムみえの事業内容の認知度や教職員の認識が薄いことなどをご指摘いただいた。

最後に事業責任者の山本理事から、フロアにCOC+事業に対する協力への感謝が述べられ、県内就職率の目標は未達であるが、今後も目標を達成すべく努力していくことが語られた。また、高等教育機関が中心となって三重を知るための教育カリキュラムを構築してきた一方で、企業も含めて産学官が参画したカリキュラムづくりにはまだ課題が残ることなどが述べられた。

続いて、ファシリテーターから、①三重創生ファンタジスタの取り組みのなかで高等教育コンソーシアムみえに継続・推進してほしいこと、②成果を検証できる仕組みとしてどのようなものがあるか、ということについて



問いかけがあり、山本理事から①については、具体的な内容がまだ明確になっていないがこれまで取り組んできたことを縮小するのではなく、拡大できるように関係者の調整が必要になってくること、特に教員、学生の交流および自治体、企業との協調・協働は今後も進めていかなければならない、ということが強調された。②については、PDCA サイクルを回し、外部からの目を意識し、内部点検も強化していくことが重要であるとの意見が述べられた。

齋藤氏からは、①については、学生の自主的な取り組みをサポートしていける体制づくりや地域志向科目の拡充が重要であること、②については、KPIの指標を設けること、KPIのルーブリックを作成することなどが有効ではないかという、コメントをいただいた。

横田氏からは、①は三重創生ファンタジスタを段階別に見たときに、活躍のステージにおいて、県として県内企業の魅力発信やマッチングなどを期待していること、②は、中長期的に三重創生ファンタジスタがどのように活躍しているかを追いかけること、三重創生ファンタジスタが相互に連携できる体制をつくること、既卒者と現役学生のつながりを持ち次世代を育成していくことなど、広い意味での成果の検証が必要になってくるとご指摘いただいた。

岡森氏は、企業側からのコメントとして、三重創生ファンタジスタの人材像であるイノベーションを推進できる人材が企業に入ってすぐに活躍できるというわけではなく、入社してからまず3年間を我慢できるかどうか重要で、長く勤めていれば、然るべきポストに就いたときにはじめて地方創生などにも取り組み、三重創生ファンタジスタとして活躍できることをご指摘いただいた。また、「情熱に勝る能力はない」と言われるが、熱意を持って仕事に取組み、辛抱強く経験を積み重ねていくことができるような人材を育てていただきたいとエールを送っていただいた。

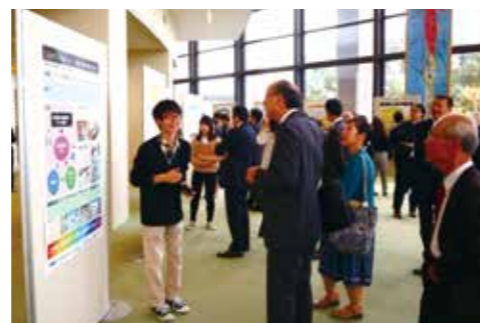
最後に加藤氏から、①については、コンソーシアムみえの意義を問い直し、高等教育機関間で意義を共有することが重要であること、②については、3つの視点をご提示いただき、1つめは各大学の特色を出した指標のほかにも学生を見届けていくための共通の指標を作ること、2つめは、現在、大学生と同じように、高校生もふるさと学習といった地域をフィールドとした取り組みを行っており、大学生との活動の場を作るなどが考えられること、3つめは、三重創生ファンタジスタ資格を持った学生がどのように活躍しているのか、現役生とどのように関わってくれるのかを見届ける必要があることのご意見をいただいた。

また、来賓としてご参加いただいた四日市大学の岩崎恭典学長からは、県内の大学への進学率や就職率向上の取り組みとして、高校との接続が非常に重要になってくるとお話しいただいた。

● 学生によるポスターセッション(地域活動等事例報告)

ポスターセッションでは、サークルや授業等で地域活動を行っている県内の学生が、それぞれの活動成果をまとめ、シンポジウム参加者に説明した。ポスターは、合計16報告集まり、参加者らは学生の熱心な活動に感心していた。ポスター報告は以下の通り。

- ・三重創生ファンタジスタクラブ(以下MSFC)「紀北魂ふるじえくと」
- ・MSFC「耕作放棄地再生に向けた大学での取り組み～モデル地区作成に向けて～」
- ・MSFC「森の王様 Tapio」
- ・MSFC「ペット防災～カレンダープロジェクト」
- ・MSFC「Colorful Machiart -若者が集まるまちづくり-」
- ・MSFC「ヒトチズプロジェクト」
- ・MSFC「え?美杉に住んじゃう!～移住者を呼び込むイベント企画～」
- ・MSFC「お寺をより身近なモノに・・・!」
- ・MSFC「子どもの夢を育てる!紙芝居クエスト」



- ・四日市大学「地域に貢献した大学生生活」
- ・四日市大学「伊勢湾に豊かな海を取り戻そう～世代・地域を越えてつながれ!～」
- ・皇學館大学「伊勢シーパラダイス 体験アクティビティ開発プロジェクト」
- ・皇學館大学「みんなの声を聞くには?プロジェクト」
- ・皇學館大学「あばばい」
- ・鳥羽商船高等専門学校「漁獲かごを用いた新規アクティビティの提案」

● 第三部 事例発表「学生が地域から学んだこと」

第三部は、「学生が地域から学んだこと」というテーマで、四日市大学、皇学館大学、三重大学から5組の学生が地域での取り組みを報告した。

まず、1組目は、三重大学生物資源学部2年の浦野未来さん、山下侑葉さんが、「DOT 動物の防災と保護を考える」と題して、保護犬、保護猫の里親会の手伝いや啓もう活動等を行う DOT の取り組み内容や、ペット防災の普及活動について報告した。「ペット防災」という言葉や内容の認知度は非常に低いですが、日本は南海トラフ地震のような大災害が起こる確率が高く、災害時にペットを守ることも飼い主の義務である。そこで、当サークルでは、「ペット防災カレンダー」を作成し、日頃からペットの防災を意識してもらうことを目的として活動しているとのことであった。

2組目は、四日市大学環境情報学部4年の平野智也さんが、「22世紀奈佐の浜プロジェクト学生会～地域から学んだ持続可能なつながりに必要なこと～」というテーマで、三重県答志島にある奈佐の浜の漂着ゴミの清掃活動や愛知、岐阜、三重の学生が連携した学生会の取り組みについて報告した。

3組目は、「子どもの夢を育てる 紙しばいクエスト」は、三重大学人文学部1年の大前南歩さん、教育学部1年の藤田梨緒那さん、濱口友希さんが、子どもたちに地元の魅力を知ってもらうために、みんなの夢を守る三重県ヒーローズの「伊勢うどんくん」と「津ぎょうざくん」を紙芝居とお芝居で披露し、活動内容を紹介した。

4組目の「伊勢シーパラダイス体験アクティビティ開発プロジェクト」は、皇學館大学教育学部2年の野津友佳さんが、伊勢夫婦岩・めおと横丁の活性化を目指して二見の塩を使ったバスボムづくりなど体験



アクティビティを開発し、滞在時間の延長につながる取り組みについて報告した。バスボムをつくるにあたっては、色や匂いなど伊勢らしい商品づくりのための協議を重ね、伊勢木綿を使った新たな商品開発も取り組んでいることなどを説明した。

最後に、「三重創生ファンタジスタを通して学んだこと」というテーマで、三重大学人文学部4年の岡本守永さんと生物学部4年の井田千尋さんが、三重創生ファンタジスタとしてどのように授業やクラブに関わってきたかを報告した。

事例報告後の意見交換では、ファシリテーターの三重大学地域人材教育開発機構・東大史講師から、地域活動のモチベーションは何かと学生に問いかけ、ペット防災について報告した浦野さんから、「動物が好きなので殺処分されるような犬猫が減って、動物たちと触れ合っているとモチベーションが保てる」と回答があった。また、ファシリテーターからは地域活動をしていくなかで自分たちの将来にどのような影響があったかという問いかけがあり、四日市大学の平野さんは「活動のなかで離島の漁師や住民の生活に触れて地域について考えるようになり、海だけでなく山も含めた流域志向という考え方から、思い切って新潟県にある林業系の、環境に特化した専門学校に進学を決めた。進路のきっかけになった「これ」というものが特にあるわけではなく、出会った人すべてから影響を受けた。」と話した。三重創生ファンタジスタの岡本さんは、「民間からも内定をもらって悩んだが、Job キャラバンのなかで三重県庁の方と話をしたり自分たちの地域活動に関心を持ってもらったりしたことで、三重県で働けば、地域活動をやりたいという学生をサポートできると思ったことがきっかけ」と答えた。また、活動の継続性という視点では、紙芝居クエストの藤田さんから「活動のための資金調達が課題となっていて、コンテスト等に出席して活動を支援してくれる人を募ったり、フリーマーケットなどで協力してくれる人を集めたりしようと考えている」と話があった。最後に、フロアにいる関係者へのお願として、「自分たちの活動を発表するシンポジウムやみえまちキャンパスといった場を学生たちだけで作るのは難しいので、学生が成果を報告できる場を引き続き提供してほしい」という要望があった。

● 閉会挨拶

閉会挨拶では、三重短期大学 村井美代子学長より、キックオフシンポジウムから本 COC+ 事業が非常に注目されていたプロジェクトであったことや、三重創生ファンタジスタの資格取得の体制が整ったことや、三重創生ファンタジスタ資格を持った学生が県内企業に就職し始めたことなどをお話いただき、最後に、今後も三重県を愛してその将来を真摯に考える若い世代の育成に努めていきたいとご挨拶いただいた。



● おわりに

本シンポジウムの司会は、三重大学人文学部1年の大前南歩さん、教育学部1年の藤田梨緒那さんが務め、シンポジウムを円滑に進行いただいた。司会の2人からは、最後に、「これからも地域からさまざまなことを学べるように頑張っていきたい」、「ポスターセッションや地域活動の報告をすることで成長することができた」との感想をいただいた。

また、当日のシンポジウム運営にあたっては、三重創生ファンタジスタクラブに所属する学生が多数参加し、進行をサポートしていただいた。

三重創生ファンタジスタクラブ (MSFC)

三重創生ファンタジスタの養成にあたり、授業などにとられることなく学生が主体的かつ自由に地域活動を推進できるよう、三重創生ファンタジスタクラブ(以下、「MSFC」という。)を部活動として立ち上げた。平成29年に結成し、初年度は木曽岬町の地域活性化、御浜町のPR動画作成、留学生の支援、三重県内の餅菓子のPRやSNS・ブログを使った広報活動などを行った。昨年度は、津市美杉町の空き家の利活用をはじめ、伊賀組紐のPRや、三重県産の食材を使用したカフェの運営、インスタグラムでの津市の魅力発信などを行った。今年度は部員も大幅に増加し令和元年12月現在で40名の三重大学生と2名の三重短期大学生が所属している。

自治体、地域、協働する団体等でプロジェクトを分けて、それぞれの担当や役職を決め多くの活動を展開している。以下に各プロジェクトの詳細を記載する。

● ヒトチズプロジェクト

津市美杉町のJR名松線伊勢奥津駅周辺の歴史街道「伊勢本街道」について、もっとたくさんの方に楽しんでもらえる観光を提供したいという学生の声から始まったプロジェクト。伊勢奥津駅前の伊勢本街道は「奥津宿」と呼ばれ、昔ながらの宿場町の景色が広がっている。しかし、その街道も今となってはほとんどが空き家となり、閑散とした雰囲気になってしまっている。

MSFCの学生たちはその風景を見て、昔の栄えていた時代はどんな景色だったのか、どのような活気に包まれていたのかを知りたいという思いから、現在まだそこで生活している高齢者にインタビューを行い、昔の楽しいエピソードや様相を自分たちが描いた地図に落とし込もうという目標を立てている。地図が出来上がれば、駅前の各施設に置いてもらい、観光客にその地図を見て今と昔の比較をしながら町歩きを楽しんでもらえることを目指して活動を行っている。



● カラフルマチアート

アートを使って地域に若者を呼びたい!という思いから始まったプロジェクト。昨今、スマートフォンが普及し、それに伴ってSNS人口も増加している。観光地やカフェでは、フォトジェニックなモノに多くの人が集まる傾向にあり、若者はこれを「インスタ映え」と呼び観光や飲食店選びの基準としている事が多くなってきた。

MSFCの学生たちはこれを利用し、PRしたい地域の構造物にアートを施すことにより「インスタ映え」を作り出し、若者を呼び込もうと考えている。地方で林業関係に使用しているトラックは木目調に塗装し、津市の飲食店である「金鍋」の送迎バスには津市の名物・伝統をイラストにしてラッピングを施した。またシャッターが閉まっている店舗が多い商店街では、地域のイベントに合わせて歩道にチョークアートを施し、道行く人々を魅了した。さらに活動をする際、商店街関係者やその子どもと一緒に活動することで地域との交流も図った。

その他にも、伊勢奥津駅前の建物のシャッターへの塗装計画も進めており、三重大学の「学生アイデアブラッシュアップ支援」事業では10万円の支援金を獲得している。





● 田舎で楽しい暮らし体験イベント

津市美杉総合支所地域振興課が進める事業にMSFCが参画し、空き家の利活用と美杉地域の認知度向上のため、イベントの企画を行った。昨年に引き続き、美杉の空き家バンクにアカウント登録している人や美杉に興味を持っている人をターゲットに田舎体験メニューを組み立てた。MSFCのメンバーはまず魅力の再確認を行い、どのようなコンテンツをイベントに組み込むかを精査し、薪割りやかまど体験、木工体験などを行い、特に移住を考えている人には移住相談会を実施した。それぞれが、自分の役割をしっかりと認識し、参加者の案内やサポートを行った。

当日は11名が参加し、地域振興課の職員の方は「このような若い人の意見を取り入れたイベントが出来てうれしい。今後も頑張りたい。」と話していた。参加者も「次は友人や家族を連れてまた来ます。」と話していた。怪我、事故等もなく、イベントは大成功だった。



● チームマチャ

就農者が年々減少する昨今、耕作放棄地の面積は年々増加している。三重大学の町屋海岸付近の農地も同じく耕作放棄地が問題になっており、自治会の住民たちがこの問題に悩んでいた。この取り組みは栗真町屋町の自治会と津市、また三重大学と学内の部活サークル3団体が協働で行った耕作放棄地再生プロジェクトで、耕作放棄の再生だけではなく大学と地域との交流も目指している。

参加した三重大学の部活サークルは「Meiku」「のうらく」「MSFC」の3団体。トラクターで土を耕し、木の根や石などを手作業で取り除き、畝を立て、種を蒔き、収穫まで行った。土壌は砂が多く、栄養も少ないため収穫量はごく僅かであったが、耕作放棄地が再生された事に加え、この取り組みをきっかけに学生が地域の祭りに参加し手伝いをするなど、深い交流のきっかけにもなった。今後はこの土壌にあった野菜や品種を模索し、来年は収穫量を増加させることを目標としている。



● 紀北町プロジェクト

紀北町役場、(株)三重 TLO、MSFC が連携して紀北町の新ブランド「きほくもん」の立ち上げに取り組んだ。紀北町はもともと別々の自治体だった「紀伊長島」と「海山」が合併して「紀北町」になったこともあり、紀北町の認知度が低いことと紀伊長島地域と海山地域に一体感が無いことに大きな問題を抱えていた。紀北町役場では認知度向上のためにも、各地域で一体感を持ってもらうことが重要と考え、新規ブランド「きほくもん」の創設を推進した。その立ち上げに協力する機関として、COC+の事業協働機関である(株)三重 TLO に依頼。また、若者にも知ってもらいたいという思いからMSFCにも依頼が来た。

MSFCの主な仕事は、現場を回って実際に商品やサービスを取材し、各事業者との交流を通して、どのように一体感を出し、認知度を上げるかということであった。最終的に14の事業者を回り、そのすべての事業者の統一感を出すために同じロゴやデザインを考えて各々の事業者用チラシ広告を制作する運びとなった。このプロジェクトに参加した学生は全員、紀北町に行ったことがなく、7割は「紀北町」という地域名も聞いたことがない状態であった。最終的には参加した学生全員が紀北町のファンになり、もっとこの地域の魅力をたくさんの人に知ってもらいたいという意識で臨んでいる。



● お寺であそぼっ!

津市にあるお寺「正覚寺」が子どもたちにとって身近なモノになること、また、地域に対する愛着を深めてもらうことを目標に、小学生を対象としたイベント「お寺であそぼっ!@正覚寺」を計画した。この計画にはSNS上で賛同を得た同志社大学、立命館大学、追手門大学と皇學館大学の学生も交え、協働で取り組んだ。それぞれが津市や三重県のことを深く知ってもらえるような遊びを考案し、楽しみながら三重県に愛着を持ってもらえるようなイベント運営を心掛けた。正覚寺副住職である正親一宣氏はこのイベントを継続していくことで、子どもたちが帰ってくることで町作りの一助になりたい。」と話しており、MSFCメンバーとその他の大学の学生たちもその想いに応えられるように、そしてなにより子どもたちが楽しめるように何度も議論を重ねた。各大学間の距離が遠いこともあり、ミーティングや予行演習などはインターネットを利用して効率よく行った。

イベント当日には9人の子どもが参加し、カルタや宝探しゲーム、紙芝居、流しそうめんなどを楽しんだ。参加者の保護者からは「普段家でゲームばかりしているうちの子が、こんなに元気に体を動かして楽しんでいるところを久しぶりに見ました。ありがとうございました。」と感謝の声があった。



● こうちく男爵

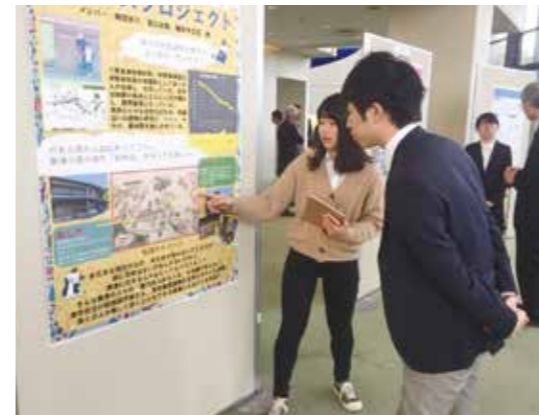
津市にある、苺農家「こうちく男爵」は、自分たちで育てた苺を使ったお菓子作りを通して6次産業を行っている。地域活動をしていた MSFC のメンバーに声がかかり、一緒にお菓子作りの開発を試みないかと相談されたことから始まった。MSFC だけではなく三重大学のカフェサークル「Le Lien」とも協働し、農家見学やお菓子作りのアイデア出しワークショップなどを行っている。参加した学生たちはこうちく男爵の苺を試食しながら様々な商品企画を行った。

企画した商品は、令和元年12月14日、15日にイオンタウン津城山店でお披露目会を行った。



● 様々な発表会

様々な地域貢献活動や三重の魅力発信を行ってきた MSFC の学生たちはその成果をシンポジウムや学会などで発表している。中部地区 COC 事業採択校学生交流会やアカデミックフェア、みえまちキャンパス、東海学生アワードなど、年間に非常に多くの口頭発表やポスター発表をしている。また COC+ シンポジウムでは会場の設営から司会、片づけなどにもかかわり、「三重創生ファンタジスタ」の教育を受けた人材としての誇りをもって発表していた。



MSFC は今年度で第3期目の活動となり、学外で地域や人と交流する機会が増えノウハウも蓄積してきた。現在では地域で活動することで、その活動が次の活動につながったり、他団体や他地域との連携にも繋がってきている。このような相乗効果を発揮し、新しい協働を作っていく仕組みが完成に近づいていることもあり、第4期もさらなる躍進に向けて会議や活動を進めている。

以下に左から MSFC の学生ブログ、twitter、instagram、Facebook ページの QR コードを載せる。



三重創生ファンタジスタ成長アンケート

本年度は三重創生ファンタジスタクラブに所属する学生を対象に、クラブでの地域活動が自身の成長にどのように結びついているかを把握するため、「三重創生ファンタジスタ成長アンケート」を実施した。アンケートはクラブ活動の影響を測定するため、活動が本格化しはじめる7月と、地域活動のある程度体験した1月に実施した(地域活動の内容については、P.45を参照)。

なお、本アンケートは、大学コンソーシアム京都の許可をいただき、森正美・大東貢生・笠井賢紀・桂良彦・生谷謙次・筑田一毅『京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長実感調査Ⅱ～地域活性化動の効果検証と今後事業改善に向けて～』(2016)の「京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長についてのアンケート」を改変して使用させていただいた。

● 実施概要とアンケート内容

日程：7月2日～19日(事前アンケート)、1月7日～22日(事後アンケート)

実施方法：ダググルフォーム

【アンケート内容】

属性：学年、性別、所属学部、出身県、兼部の有無、アルバイト経験の有無、入部のきっかけ

【行動力】

1. 何をしたらいいかわからず、行動できない
2. 周りからの指示があれば、行動できる
3. 周りからの指示がなくても行動できるが、目標を意識していないことが多い
4. 自分で判断して行動できるが、目標を達成できないことがある
5. 自分で判断して行動し、目標を達成することが出来る

【責任感】

1. 自分の役割が分からず、何をしたらいいかわからない
2. 自分の役割を把握しているが、完全に果たすのが難しい
3. 自分の役割を把握して、自分の役割を果たすために努力している
4. 自分の役割を把握し、役割を果たしている
5. 自分の役割の範囲だけでなく、全体を把握して自分の役割を拡張することが出来る

【活動への取り組み姿勢】

1. 周りが何をしているのか分からず、後ろで見ているだけのことが多い
2. 周りが何をしているのかわからないまま、機械的に言われたことをやっている
3. 活動の目的を理解しているが、特にやりがいは感じない
4. 活動の目的を理解して、日々の活動を楽しんでいる
5. 活動の目的を理解して、やりがいや自己肯定感を感じながら活動している

【三重県への関心度】

1. 三重に興味関心がなく、三重のことを知ると思わない
2. 三重に興味関心はあるが、三重のことを説明できない
3. 三重に興味関心があり、三重のことを説明することが出来る
4. 三重に高い興味関心があり、三重のことを実体験をもとに説明することが出来る
5. 三重に高い興味関心があり、自ら三重の魅力を発見し、その魅力を発信したり新たな価値を生み出すことが出来る

【前向き力】

1. つらい状況になった時に、くよくよ考えてしまい、気持ちの切り替えがなかなかできない
2. つらい状況になった時、気持ちの切り替えをできることがある
3. つらい状況になった時、気持ちの切り替えをできる
4. つらい状況になっても、前向きに行動できる
5. どんな状況になっても、常に前向きに行動し、周りの空気も変えることが出来る

【論理的思考力】

1. 考えることができない、もしくは一つ一つの情報も理解できない
2. 各々の情報は理解できるが、その関係性はわからない
3. 各々の情報を理解できるし、その関連性も理解できる
4. 関連性を理解した上で、全体の中で自分がどの役割なのか理解できる
5. 手元にある情報はすべて理解し、自分で関連性を整理し、活用することが出来る

【洞察力】

1. 与えられた課題そのものがわからない
2. 目の前の仕事に対しては取組むことが出来る
3. 自分のチームの企画の流れを理解し、実行に移すことが出来る
4. 活動全体の流れを捉えることができ、優先順位をつけて実行に移すことが出来る
5. 物事を実行するにあたり、不測の事態も考慮し、対処法や予防法を考えることが出来る

【コミュニケーション力】

1. 相手の考えていることが理解できない、自分の考えていることも言葉にできない
2. 相手の考えは理解できるが、自分の考えを理解してもらえない
3. 相手の考えも理解でき、自分の考えも理解してもらいことができる
4. 背景を含め、相互理解を深めて、より有益な関連情報を交換し合える
5. 背景を含め、相互理解を深めて、より有益な関連情報を交換し合ったうえで、協力を得ながら物事を進めることができる

【協力を得る力】

1. 誰にも相談できず、自分で抱え込んでしまう
2. 誰にも相談できず、自分で解決しようとする
3. 誰かに相談し、アドバイスを受け取ることが出来る
4. 誰かに相談し、解決に向けて協力を得ることが出来る
5. 解決のために周りの人が同じ目標に向かって行動してくれる

【伝える力】

1. 伝えたいことがわからない
2. 伝えたいことはあるが、うまくまとまらず、言葉にできない
3. 伝えたいことを言葉にすることはできる
4. 自分の意見をわかりやすく他人に説明することができる
5. 自分の意見をわかりやすく他人に説明することができ、かつ共感や協力を得ることが出来る

【多様性の理解力】

1. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心がない
2. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心はあるが、理解できていない
3. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心があり、理解できているが、行動までつながらない
4. MSFC、産学官、地域の関係者に理解を示し、行動できる
5. MSFC、産学官、地域の関係者の考えやニーズ、強みなどを把握し、新たな価値を創造することが出来る

【チームワーク力】

1. チームメンバーの人の考えを理解することができず、一緒に行動することができない
2. チームの一員として動くことが出来る
3. 自分の役割を自覚して、チームの一員として動くことが出来る
4. チームメンバーとして動くことができ、メンバーの良さを引き出すことが出来る
5. チームメンバーの良さを引き出し、お互いの足りない部分を補うことが出来る

【地域への理解】

1. 地域のニーズ、課題を理解できない
2. 地域のニーズ、課題を理解できる
3. 地域の課題解決に加わることが出来る
4. 地域の方々と力を合わせて課題解決にむけて行動できる
5. 地域課題の解決案を自ら提示し、地域の方々と力を合わせて課題解決にむけて行動できる

回答はアンケート時の状況に当てはまるものを選択させ、質問毎に任意で理由を入力できる欄を設けた。

● 結果

三重創生ファンタジスタクラブには、2019年7月現在、39名が在籍し、1年生が28名、2年生が4名、3年生が1名、4年生が5名、大学院生が1名という内訳であることから、本アンケートでは、クラブの大半を占める1年生を中心に分析した。1年生は、地域活動を行っていない段階から半年程度の地域活動に携わった経験の結果が反映されているものと思われる。

下図は、1年生の事前アンケートと事後アンケートの結果をポイント化し、比較したものである。上記のアンケート内容は、5に近いほど能力は高度であり、事前より事後の数値が高ければ、成長が感じられていることを示している。アンケートの結果、すべての項目において、ポイントが上昇しており、特に「三重県への関心度」、「コミュニケーション力」、「地域への理解」が大幅に伸びていることが分かる。また、「活動への取り組み姿勢」などは事前アンケートの数値が高く、もともと意欲を持って入部してくる学生が多いこともうかがえる。

本アンケートの結果から、学生が地域において関係者と協力体制を築きながら、積極的に地域貢献の活動を行うことで、ジェネリックスキルに加えて、地域への関心や理解を高めることが判明した。今後も地域での活動を継続することで、学生の成長が期待される。

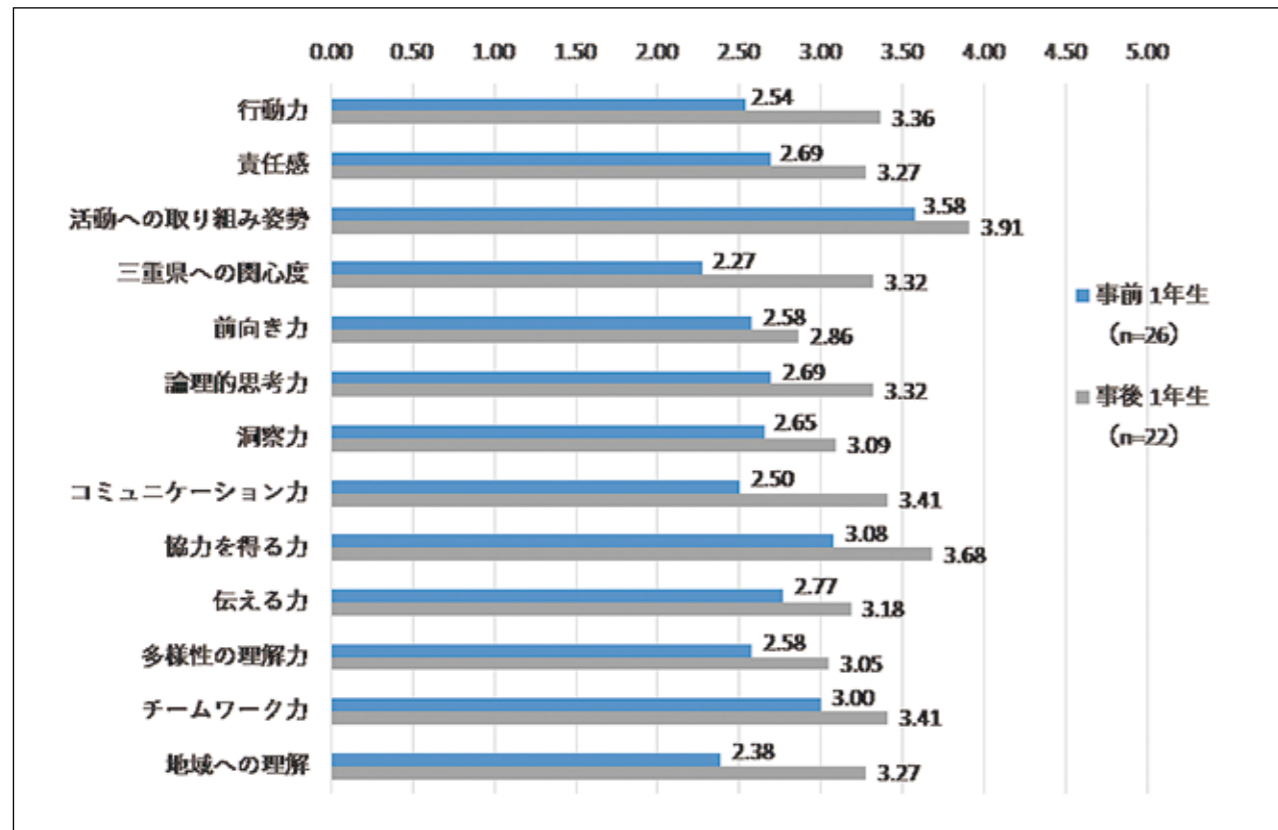


図 1年生の事前・事後アンケートの結果比較

三重ラーニングジャーニー

令和元年9月19日、映画「WOOD JOB！」のロケ地となった林業の町、津市美杉町を訪問し、好評だった昨年度に引き続き三重県の魅力的な産業を学ぶ「三重ラーニングジャーニー」を実施した。三重大学生15名、他大学生2名の計17人が参加し、映画のロケ地を回りながら林業の1次産業及び2次産業を体験しながら学んだ。

参加者に林業界や林学についての知識は無かったが、現場を見学しながら林業のプロから基礎的な部分も含めたお話を伺い理解を深めた。山の現場ではきこり体験をするなど、林業について学修した。



林業家の方々から参加した学生に向け、林業界が抱えている問題や厳しさがある一方で、林業界ならではの素晴らしさや将来性があることについても熱心に語っていただいた。参加した学生からは「時代の流れに沿って、林業も変わっていかねばならない事がわかりました。」「私たちがもっと国産材を消費することで林業全体が活気づいてほしいと思いました。」などの感想が寄せられ、様々な学びを得た様子であった。



Job キャラバン

Job キャラバンは高等教育機関に入学したばかりの学生を中心に、県内企業の社員や社長とざっくばらんに職業観について対話をする中で、学生生活をどのように過ごすべきかのマインドセットや県内企業の魅力を知ってもらうことを目的とした、県内就職率向上に向けた取り組みである。就職活動が目的ではないため、率直に聞きたいことを質問でき、企業、学生共に満足度も高いことが特徴である。今年度は従前どおり四日市大学、三重大学、皇學館大学、鳥羽商船高等専門学校、鈴鹿大学にてJob キャラバンを開催した他、新たに鈴鹿工業高等専門学校でも開催された。

● 四日市大学会場

平成 31 年 4 月 19 日 (金) 開催

四日市大学会場は、昨年度に引き続き四日市大学長が担当教員となる1年生必修科目「人間たれ」において実施した。189 名が出席し、参加企業等からは業務内容や就職活動時の実体験、そして、そのために4年間の間に何をすべきか等を語っていただき、学生から事前に受け付けた質問にも回答してもらった。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は 90% (満足 = 34%、やや満足 = 56%) であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。



【参加企業等】(株)アサプリホールディングス、三岐鉄道(株)、四日市市

● 三重大学会場

令和元年 5 月 18 日 (土) 開催

三重大学会場では県内企業等を6社招き、5名程度の班に分かれた学生らが、10分ごとに各企業のテーブルを回っていく方式で実施した。各チームの最初に企業から簡単な企業紹介があった後、学生の質疑応答の他、活発な対話がなされた。本イベントは授業「地域発見型インターン」(P.30 参照)でも実施し、三重大学生、四日市大学生の合計 54 名が参加した。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は 100% (満足 = 81.5%、やや満足 = 18.5%) であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。



【参加企業等】井村屋グループ(株)、住友電装(株)、津市役所、(株)百五銀行、三重交通(株)、ヤマモリ(株)

● 皇學館大学会場

令和元年 5 月 29 日 (水) 開催

皇學館大学会場では、県内企業を8社招き、初年次のゼミ授業を受講している 85 名の学生が参加した。1企業に対し10名程度の学生が90分間じっくり対話する時間を設けたことで、その企業の魅力が十分に伝わり、学生の質問に対しても丁寧に回答する様子が見られた。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は 95.3% (満足 = 60.0%、やや満足 = 35.3%) であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。

回答	人数	割合
1 明確に意識できた	19	22.4%
2 ある程度意識できた	60	70.6%
3 あまり意識できなかった	6	7.1%
4 意識できなかった	0	0.0%

回答	人数	割合
1 とても持てた	35	41.2%
2 やや持てた	39	45.9%
3 あまり持てなかった	7	8.2%
4 持てなかった	4	4.7%

【参加企業等】(株)コイサンプズ、キクカワエンタープライズ(株)、(株)第三銀行、三重交通(株)、クラギ(株)、百五証券(株)、(株)コムデック、(株)鳥羽水族館

● 鳥羽商船高等専門学校会場

令和元年 7 月 1 日 (月) 開催

鳥羽商船高等専門学校会場では、県内企業4社を招き、電子機械工学科及び制御情報工学科の4年生を対象とする授業で実施した。授業を受講している 74 名の学生が参加し、企業の方々からの説明が終わった後は学生から女子学生の採用や海外進出等についての質問があり、就職を強く意識する姿勢が見られた。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は 83% (満足 = 27%、やや満足 = 56%) であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。



【参加企業等】 扶桑工機(株)、岩崎工業(株)、三重樹脂(株)、(株)松和産業

● 鈴鹿工業高等専門学校会場
令和元年10月23日(水)開催

鈴鹿工業高等専門学校では、県内企業5社を招き、来年にインターンシップを控える3年生230名を対象に実施した。時間を前半・後半に分け、前半は所属するクラスに関連する企業を、後半は専攻を超えて興味のある企業の話を中心に聞ける方式にしたことで、初回ながら学生から高い満足度が得られた。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は97.3%(満足=64.9%、やや満足=32.4%)であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。



【参加企業等】(株)LIXIL 久居工場、美和ロック(株)、(株)パワービー、協同油脂(株)亀山事業所、(株)光機械製作所

● 鈴鹿大学会場
令和元年11月7日(木)開催

鈴鹿大学会場では、県内企業4社を招き、1年生必修授業「初年次セミナーB」、2年生必修授業「初年次セミナーII」に位置づけ実施した。留学生が多い鈴鹿大学と関わりの深い企業から求める人材像や鈴鹿大学の卒業生、留学生の採用等について話があり、学生からも積極的に質問が飛び交った。



イベント後アンケートを実施したところ、総合満足度は91.9%(満足=56.8%、やや満足=35.1%)であった。そのほか、以下のようなアンケート結果が得られた。



【参加企業等】(株)アスト、(株)アクアイグニス、(株)中勢ゴム、(株)トピア

● 事業の継続について

COC+ 補助期間終了に伴い本取り組みも終了となるが、学生・企業双方からの満足度が高いため、来年度以降も実施可能な高等教育機関では継続していくか、自校ですでに実施している県内企業の就職イベントと組み合わせることができるか等の継続実施を前提とした検討を進めていく。

参加企業・学生の声

- 会社について知っていただけただけでなく、こちらとしてもどんな疑問があるのかを知ることができる良い機会となりました。(三重大学参加企業)
- 中小企業にとって、また、三重県の中でも中南部地域は特に学生さんが卒業後来ていただける事がなかなか困難であり、このようなイベントを一校でも多く企業紹介兼ねた授業の一環として推し進めていただければと思います。(鳥羽商船高等専門学校参加企業)
- 将来、自分がしたいと思うことがあってもそれが本当に自分の望んでいることなのか不安になることがあります。今回のお話で仕事にどういった気持ちで向き合っているかを聞くことができ、私ももう一度やりたいと思うことに向き合ってみようと思いました。(皇學館大学生)
- 働いている人の生の声を聞け、ネットだけではわからない会社のイメージを1年生の内からつけることができ、とても参考になった。(四日市大学生)

高校生向け公開講座

県内就職率向上に向けた入口戦略の一環として、三重大学における高校生向け公開講座であるサマーセミナーや、三重大学オープンキャンパスなどの機会を利用し、高校生への資格啓発を行った。高校生にとって教員や社会人よりも身近な存在である大学生の方が声も届きやすいと考え、三重創生ファンタジスタの学生が中心となり、高校生に三重創生ファンタジスタ資格の魅力等を伝えた。

● 三重大学サマーセミナー

令和元年7月24日(水)に「見つけよう、自分に合った学問分野～2030 SDGs 探求 MAP を使って～」(担当教員:三重大学地域人材教育開発機構 宮下伊吉准教授)を実施し、三重創生ファンタジスタクラブの大学生5名もアシスタントとして参加、高校生10名が受講した。SDGsの17の目標と16の学問分野を題材に、事前課題を準備した学生たちがグループワークを行った。高校生が最後に個人発表を行い、高校生にとっては自分に合った学問分野を見つけ、将来の進路に役立てもらうための良い機会となった。



また、三重創生ファンタジスタクラブの学生は、自身の活動を高校生に伝えると共に、三重創生ファンタジスタのPRやグループワークの進行をするなど高校生をサポートし、自身の学びや成長に役立てた。

アンケートの結果

参加者の満足度は:5点満点で、5点(6人)、4点(4人) 平均4.6点

参加者のコメント(抜粋)

- SDGsという国際的な問題に三重県の身近な問題から考えることができ、理解が深まった。
- 三重大の方と一緒に作業をし、自分の興味があることについて深めることができ良かった。

● 三重大学オープンキャンパス

令和元年8月9日(金)、19日(月)、21日(水)の三重大学オープンキャンパスに三重創生ファンタジスタクラブの学生が参加した。生協第1食堂2階では、生協学生委員会が中心となって「先輩学生と語ろうブース」を開催しており、その一角を借りて三重創生ファンタジスタクラブの学生から、ブースに来場した高校生やその保護者に向けて、三重大学の魅力や三重創生ファンタジスタ資格の仕組み、また自分たちの取り組んできた地域貢献活動等を精一杯伝えた。



3日間で計22名の来訪があり、三重創生ファンタジスタ養成事業を詳細にかつ現場の生の声として具体的にアピールすることができた。

みえインターンシップフェスタ

事業協働機関である一般社団法人わくわくスイッチ主催(COC+ 共催)のもと、県内高等教育機関の学生等を対象とした「みえインターンシップフェスタ」を2回開催し、多くの学生にインターンシップの重要性をアピールした。

● みえインターンシップフェスタ 2019 SUMMER

令和元年5月21日(火)三重大学三翠ホールにおいて、「みえインターンシップフェスタ 2019 summer」を開催した。COC+は共催として参加した。インターンシップの事前研修会として、インターンシップに臨む前の心構えやインターンシップ体験生の発表、企業・学生との座談会、インターンシップ見本市等、参考になる情報が盛りだくさんで、今後も事業協働機関と共にインターンシップの施策に取り組んでいく。



● みえインターンシップフェスタ 2019 AUTUMN

令和元年11月28日(木)三重大学講堂小ホールで、「みえインターンシップフェスタ 2019 autumn」が行われた。当日は、1、2年生向けのインターンシップの基礎知識の説明、来年春休みの期間中に実施予定のインターンシップの紹介、実際に昨年度にインターンシップに参加した学生の報告会などが実施された。学生からの発表では、事業協働機関である、万協製薬(株)や、(株)アーリーバードで実施したインターンシップを通して普段の生活では、得られない体験ができたことや、自身の成長につながったことなど、インターンシップ後の振り返りが重要など様々な発言があり、会場に集まった学生は熱心に耳を傾けていた。



三重大学地域拠点サテライト

「三重大学地域拠点サテライト」では、県内全域を三重大学の教育研究フィールドと位置付け、多様な地域特性を有する4つの地域サテライト（伊賀サテライト、東紀州サテライト、伊勢志摩サテライト、北勢サテライト）を展開している。各地域サテライトにおいては、自治体・教育機関等との連携及び協力をもとに、特色豊かな活動拠点が置かれ、教員や学生がフィールドワーク等の実践的な教育研究活動を行っている。

また、これら4つの地域サテライトが地元企業や自治体と大学を繋ぐハブ機能としての役割を担うことで、地域課題の発見・共有、共同研究・共同プロジェクト等を通じた課題解決等に全学的に取り組みながら、三重大学の教育研究力の向上に加え、地域創生や地域人材育成に貢献している。

● 伊賀サテライト実績

- ・研究成果の社会還元として「伊賀忍者・忍術学講座」を開催した。（平成31年4月20日、令和元年5月18日、6月8日、6月29日、7月20日、8月17日、9月21日、10月26日、11月16日、12月14日）
- ・伊賀地域の企業と連携し、地域産業を支援することを目的として、健康科学食品研究会を伊賀研究拠点で開催した。（令和元年11月18日）
- ・学生が地域の企業をより深く理解し、地元企業への就職を増やすことを目的として、生物資源学部3年生対象の実習授業（企業研究）を伊賀研究拠点で開催した。（令和元年12月5日）

● 東紀州サテライト実績

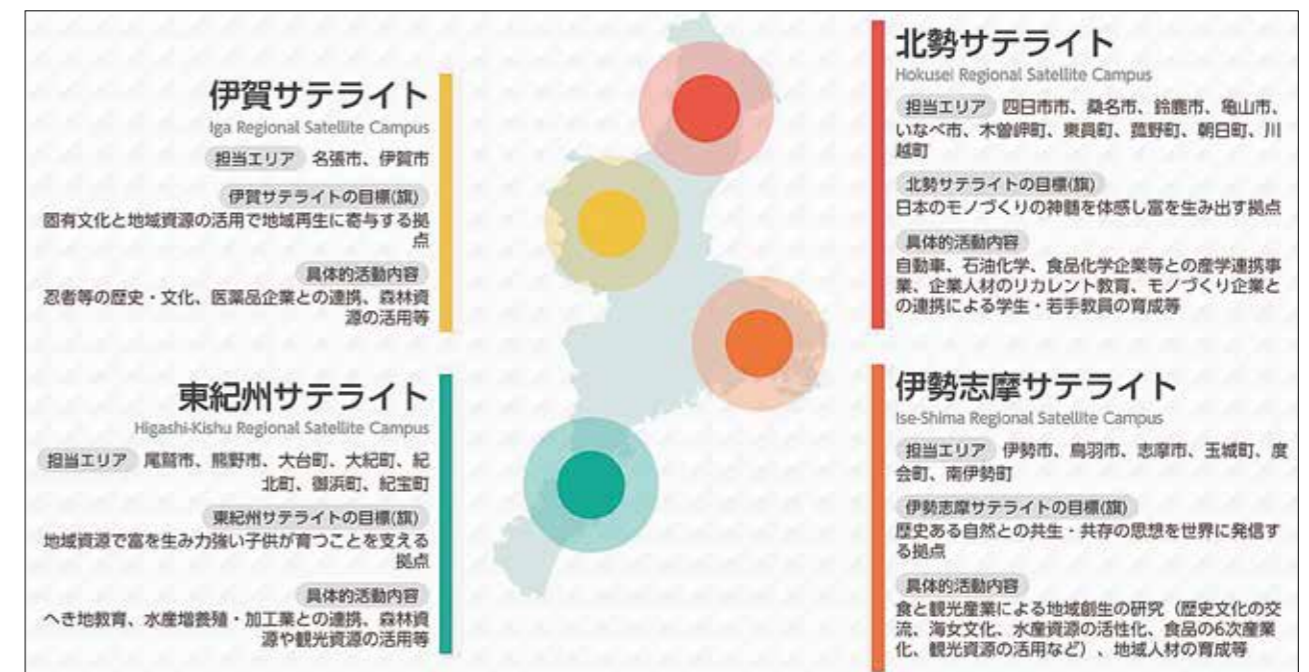
- ・三重大学の活動への理解促進、研究成果の社会還元を目的に、東紀州産業振興学舎（天満荘）セミナー「よるしゃべ」を開催した。（令和元年7月22日、9月11日、10月23日、10月29日）
- ・教育・研究成果の社会還元を目的に、東紀州サテライトフォーラム「東紀州におけるデータサイエンス」を開催し、117名が参加した。（令和元年10月26日）
- ・共同研究の増加、教育・研究成果の社会還元を目的に、東紀州サテライトセミナー「ICTを活用した林業活性化構想について」を開催し、21名が参加した。（令和元年11月15日）

● 伊勢志摩サテライト実績

- ・伊勢志摩地区の行政職員及び三重大学職員の人材育成と官学連携の基盤強化を目的とした「伊勢志摩サテライト交流会」（テーマ別研修会）を開催し、延べ92名が参加した。（令和元年7月5日、8月6日、10月4日、11月8日）
- ・伊勢志摩サテライト海女研究センターと韓国の東義大学校 韓・日海女研究所と相互有効協定を締結した。（令和元年11月22日）来年度から2年間、「文化財・観光資源としての海女-日韓文化比較の観点から」と題する共同研究を予定している。
- ・研究成果の社会還元として「海女学講座Ⅱ」を開催した。（令和元年10月20日、11月10日、12月8日、12月15日）

● 北勢サテライト実績

- ・アジアの将来を担う人材を目的とした研修機関である ITASS フォーラムと北勢サテライト SDGs 研究会が共催で、「公害と環境」をテーマにした講演会を開催した。（令和元年6月19日）
- ・共同研究の増加、大型外部資金の共同申請等を目指し、健康福祉システム開発研究会を開催した。（令和元年5月17日、7月19日、9月13日、11月15日）
- ・共同研究の増加・インターンシップ受け入れ先の確保等を目的に、大学院工学研究科公開セミナー「みんな見せます工学研究科」（令和元年7月3日、9月4日、9月25日、11月6日、12月4日）、大学院工学研究科研究室見学会「研究室も見せます工学研究科」を開催した。（令和元年12月13日）
- ・人文学部の教員及び大学院生が、北勢エリアで取り組む教育実践・共同研究成果を地域関係者の前で発表し、地域固有の文化や社会課題を共有することを目的に、「地域研究フォーラムin北勢」を開催した。（令和2年1月25日）



県内就職率向上のための様々な取り組み

平成27年度から、三重大学長が三重創生ファンタジスタ資格、インターンシップ、共同研究等について対話をするため、県内企業・団体への訪問を行っている。また、学生に三重県内の様々な地域や企業を知ってもらうため、三重大学キャリア支援センターが主となって様々な取組を実施した。

● 三重大学長による県内企業訪問

平成27年度から令和元年度までに、COC+校である三重大学の学長が延べ260の企業、団体を訪問し、三重創生ファンタジスタ資格の啓発等を行うことで、県内企業の三重創生ファンタジスタ資格への理解をより深めることに繋がった。

● 企業研究会バスツアー in 東紀州

日時：令和元年6月15日(土)
内容：企業研究会、県内企業の工場見学、官公庁からの地域や業務に関する説明、地域の課題に関するディスカッション等により地域の魅力や企業について深く知ることができた。
参加：学生40名、県内企業・団体18



● 企業研究会バスツアー in 伊勢志摩

日時：令和元年7月6日(土)
内容：伊勢神宮及びおかげ横丁の散策、企業研究会、伊勢志摩真珠館における真珠の加工体験等により地域の魅力や企業について深く知ることができた。
参加：学生48名、県内企業・団体25



● 採用担当者が語るぶっちゃけディスカッション

日時：令和元年10月15日(火)、16日(水)、23日(水)、30日(水)
内容：三重大学OB・OGの数や求める人材像、今後の採用スケジュールなど、学生が関心を持っている事柄について、普段なかなか聞くことができない深い部分まで聞くことができた。
参加：学生計125名、県内企業計23社



● 三重県内企業研究会

日時：令和元年11月27日(水)
内容：ブースに分かれて詳しく話を聞くことで、自身が興味を持っている県内企業について深く知ることができた。
参加：学生215名、企業51社



● 学内企業説明会

日時：令和2年3月2日(月)～5日(木) 実施予定
内容：三重大学において開催する企業説明会の中で最大規模であり、非常に多くの県内企業について知ることができる。
参加：企業600社(うち県内企業113社)

中小企業との共同研究スタートアップ促進事業・地域貢献活動支援事業

三重大学では中小企業との共同研究の促進や地域貢献活動の創造及び推進を目的に助成支援を行っており、今年度は43の共同研究及び45の地域貢献活動に対して支援を行った。

令和元年度 中小企業との共同研究スタートアップ促進事業 採択一覧

番号	申請者 所属	申請 区分	研究題目
1	人文学部	新規	国連持続可能な開発目標(SDGs)及びユネスコ持続可能な開発のための教育(ESD)を活かした三重県の次世代育成
2	人文学部	新規	三重県の中山間地域におけるインバウンドを中心とした「INAKA Tourism」構想による地域活性化の可能性の研究
3	教育学部	新規	科学的思考を育む調理実験プログラムの開発
4	教育学部	新規	乳酸発酵食品中の機能性成分分析
5	医学系研究科	新規	超微量持続注入装置の改良と医療応用法の開発
6	医学系研究科	新規	ゼブラフィッシュ実験機器の開発に関する研究
7	工学研究科	新規	耐熱性に優れたアルミ電解コンデンサ用電解液の開発
8	工学研究科	新規	樹脂の高度循環による低コスト化と品質・材料特性に関する調査研究
9	工学研究科	新規	試作現場におけるレーザー加工に関する課題抽出とその実用的解決
10	工学研究科	新規	和牛受精卵 AI画像認識
11	工学研究科	新規	ステロイド系薬剤の安定性に関わる要因探査とその定量評価技術の確立
12	工学研究科	新規	防災・減災に有用となる情報システムに関する研究
13	工学研究科	新規	大型金属加工物のモニタリングに関する研究
14	工学研究科	継続	ダイマー酸の還元によるダイマージオール合成法の開発
15	工学研究科	継続	プラスチックマグネットの最適化・高品質化に関する調査研究
16	工学研究科	継続	表面プラズモンセンサーを用いた屈折率計の作製に関する研究
17	工学研究科	継続	土壌浸潤ろ過を用いる簡便な尿処理法の開発に関する研究
18	生物資源学研究科	新規	高周波電場における懸濁植物細胞の動的糖代謝挙動の把握
19	生物資源学研究科	新規	フレッシュトロンを活用した魚の鮮度維持に対する最適制御方法の開発研究
20	生物資源学研究科	新規	食品およびその素材成分による細胞老化制御に関する研究
21	生物資源学研究科	新規	医薬品を目的とした天然バイオマスにおける生理活性物質の探索研究
22	生物資源学研究科	新規	CLT活用建築物のLCCO2評価
23	生物資源学研究科	新規	マツタケ山の再生をめざした森林管理手法の開発
24	生物資源学研究科	新規	スマート製材業の新展開のための木材ICTシステム「iNOJISYSTEM(仮称)」の開発
25	生物資源学研究科	新規	低糖度・安定剤無添加の果実ジャムの製造方法に関する研究開発
26	生物資源学研究科	新規	東欧産ハーブ類の生理機能解析に関する共同研究
27	生物資源学研究科	新規	土壌改良資材による微生物活性の評価
28	生物資源学研究科	新規	飼料用イネの品質向上に向けた生産体系の構築
29	生物資源学研究科	新規	単一分子シーケンス技術を活用した羽毛原料の品質管理技術の開発
30	生物資源学研究科	新規	超音波伝播法を用いた木材ヤング率測定装置のICT化
31	生物資源学研究科	新規	地域資源作物抽出物の機能性に対するレスチン等の増強効果
32	生物資源学研究科	継続	水産加工機械および加工ラインの洗浄効率向上
33	生物資源学研究科	継続	附帯施設演習林のスギを用いた三重大学ブランド商品の開発
34	生物資源学研究科	継続	有用微生物を活用した次世代型農業技術開発における分析・評価手法の確立
35	地域イノベーション学研究科	新規	深紫外LED実装の設計と実装に関する研究
36	地域イノベーション学研究科	新規	養殖ナマズ無利用資源を原料とする高品質コラーゲン製造技術開発
37	地域イノベーション学研究科	継続	無欠陥SiC表面処理法の開発とそのSiC上への高品質AINテンプレート作製
38	教養教育機構	新規	AIを活用したモータ製造ラインにおける不良品判別システムの構築
39	地域イノベーション推進機構	新規	ゆずプロジェクトの産学連携活動を通じた地方創生の取組みに関する研究
40	地域イノベーション推進機構	継続	土壌改良資材の投入による畑作物生長・堆肥熟成促進効果の検証と微生物叢を含む土壌環境の変動
41	地域拠点サテライト	新規	忍者の火器・火術に関する研究
42	地域拠点サテライト	継続	水耕栽培植物工場の環境調査・研究(水質、細菌、温湿計測等)
43	地域創生戦略企画室	継続	フォトバイオリクターによる海藻類陸上養殖技術の開発

令和元年度 地域貢献活動支援事業 採択一覧

番号	申請者 所属	申請 区分	活動テーマ
1	人文学部	新規	忍者活劇体験のプログラム開発による地域振興
2	人文学部	継続	海女漁村の歴史的古文書の調査研究～志摩市越賀郷蔵文書の文化財指定に向けて～
3	人文学部	継続	エコフィードの利活用による地域酪農・畜産の振興
4	人文学部	継続	三重県におけるアートマネージメント養成プログラムの開発
5	教育学部	新規	桑名市適応指導教室における不登校の子どもへのキャリア教育
6	教育学部	新規	保育士の食育スキル向上に向けた研修事業
7	教育学部	継続	東紀州地域の星空の観光資源化(神々が愛した星空発信プロジェクト)
8	教育学部	継続	三重県における『未来の科学技術イノベーター』を育成する産学官連携プログラムの実施
9	教育学部	継続	論理的思考能力を育成するプログラミング学習の教材開発と東紀州地域での支援活動
10	教育学部	継続	三重大学隣接中学校区の学校園における学習及び活動支援
11	教育学部	継続	東紀州地域における小学校外国語(英語)教育のシステム開発と支援活動
12	教育学部	継続	科学的思考能力獲得のための高校生の探究活動の指導
13	教育学部	継続	外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー
14	医学系研究科	新規	地域における認知症患者の早期診断と地域包括ケアへの紐付の試み
15	医学系研究科	新規	小山田総合施設群を拠点とした介護老人保健施設における地域性を踏まえた看護職・介護職の教育プログラムの開発
16	医学系研究科	継続	歯科のない病院における口腔ケアの現状の把握と標準化の試み
17	医学系研究科	継続	地域住民の就労と治療の両立を促進するためのリテラシー教育プログラムの地域での展開
18	医学系研究科	継続	日常生活における身近なものと学校授業での知識をリンクさせる事の出来る科学実験
19	医学系研究科	継続	地域でのアクションリサーチで、健康増進を改善する
20	医学部附属病院	継続	まず予防！家族で取り組む糖尿病発症予防
21	工学研究科	継続	光技術による産学官の連携と地域産業の振興
22	生物資源学研究科	新規	鈴鹿川等源流の森林づくり活動の支援
23	生物資源学研究科	新規	東紀州地域における自然災害に対する防災・減災支援活動
24	生物資源学研究科	新規	生産者と学生が協働で作出す新しい稲作経営のかたち
25	生物資源学研究科	新規	大内山川に生息する放流アユ比率の時空間変化
26	生物資源学研究科	新規	三重県の素材生産に占める高付加価値材(S材)の流通調査と林業への還元
27	生物資源学研究科	継続	三重県の中大規模木造建築設計者の育成と空き家対策
28	生物資源学研究科	継続	東紀州におけるICTを活用した科学的柑橘栽培支援
29	生物資源学研究科	継続	宮川用水のバイパス内のタイワンシジミ詰まり問題解決に向けて
30	生物資源学研究科	継続	地域の農業水利施設管理の高度化と標準化言語を利用した汎用化
31	生物資源学研究科	継続	三重大学オリジナル酒米品種「弓形穂」を活用した多気町地酒ブランド作りへの貢献
32	生物資源学研究科	継続	津のお米の味と品質を裏付ける生育診断・環境評価手法の開発と実践
33	地域イノベーション学研究科	継続	伊勢市の一次産業に関する課題抽出
34	地域イノベーション学研究科	継続	地域に根ざした人的並びに生物資源の有効活用ー大台町の地域観光施設を中心拠点とした健康長寿対策に関わる人材育成・再教育の支援ー
35	教養教育院	継続	三重大学平倉演習林で採集された昆虫標本の市民によるカタログ化と成果発信
36	地域人材教育開発機構	新規	津市美杉地区における、伝統文化の継承
37	地域人材教育開発機構	新規	明和町民とつくるDMO設立に向けたRESASを活用したデータマーケティング
38	地域人材教育開発機構	継続	地域日本語ボランティア教師用教材の開発
39	地域イノベーション推進機構	継続	三重大学地域イノベーション推進機構先端科学研究支援センター動物実験施設と久居農林高校との実験動物飼育に関するインターンシップと校外学習の試み
40	地域イノベーション推進機構	継続	地方自治体における防災・減災に関する地域課題解決のための活動支援
41	地域イノベーション推進機構	継続	地域防災課題解決に向けた地域実践活動の支援
42	地域拠点サテライト	新規	伊賀市の小学生の食生活の現状把握と改善プログラムの開発
43	地域拠点サテライト	継続	東紀州サテライトを拠点とした熊野地域の小中高の児童・生徒に対する「木育」プログラムの開発と実施
44	地域創生戦略企画室	新規	「地域の海をよく知る地域の人々が地域の子どもたちに海を教える」～三重県南部における地域産業振興と結びつけた自然資源を活用する地域人材育成事業
45	地域創生戦略企画室	新規	津市栗真町屋地区における耕作放棄地解消のための産学官連携プロジェクトの推進

高等教育コンソーシアム みえ(COC+事業継続)

高等教育コンソーシアムみえの実施会議

●総会

- 所管事項
事業計画や予算、決算、規約の改廃、役員の選出などに関すること。
その他運営に関する重要な事項並びに三重県の高等教育のあり方、将来像等についての検討に関すること。

<構成メンバー>各構成機関の長

三重大学	四日市大学	皇學館大学
鈴鹿大学	鈴鹿医療科学大学	三重県立看護大学
四日市看護医療大学	鈴鹿大学短期大学部	三重短期大学
高田短期大学	ユマニテク短期大学	鈴鹿工業高等専門学校
鳥羽商船高等専門学校	近畿大学工業高等専門学校	三重県

●企画運営委員会

- 所管事項
高等教育コンソーシアムみえの企画、運営、評価、広報に関すること。
<構成メンバー>
各構成機関の長が推薦する者と高等教育コンソーシアムみえの地域活性化推進コーディネーター

●地域貢献部会

- 所管事項
学生の地域活動支援に関すること。
地方創生に取り組む市町、地域の支援に関すること。
その他コンソーシアムの地域貢献に関すること。
<構成メンバー>
各構成機関の長が推薦する者と高等教育コンソーシアムの地域活性化推進コーディネーター

●FD/SD 部会

- 所管事項
FD/SD の情報共有
教員、職員の能力向上
専門人材の育成
<構成メンバー>
各構成機関の長が推薦する者

●教育連携部会(令和2年度より開始予定)

- 所管事項
三重創生ファンタジスタの養成
<構成メンバー>
各構成機関の長が推薦する者

主な実績

●総会(6月、3月開催予定)

- ・事業計画の決定、前年度の決算の審議
- ・高等教育コンソーシアムみえの令和2年度以降の方向性についての協議

●企画運営委員会(5月、10月、2月、臨時9月開催)

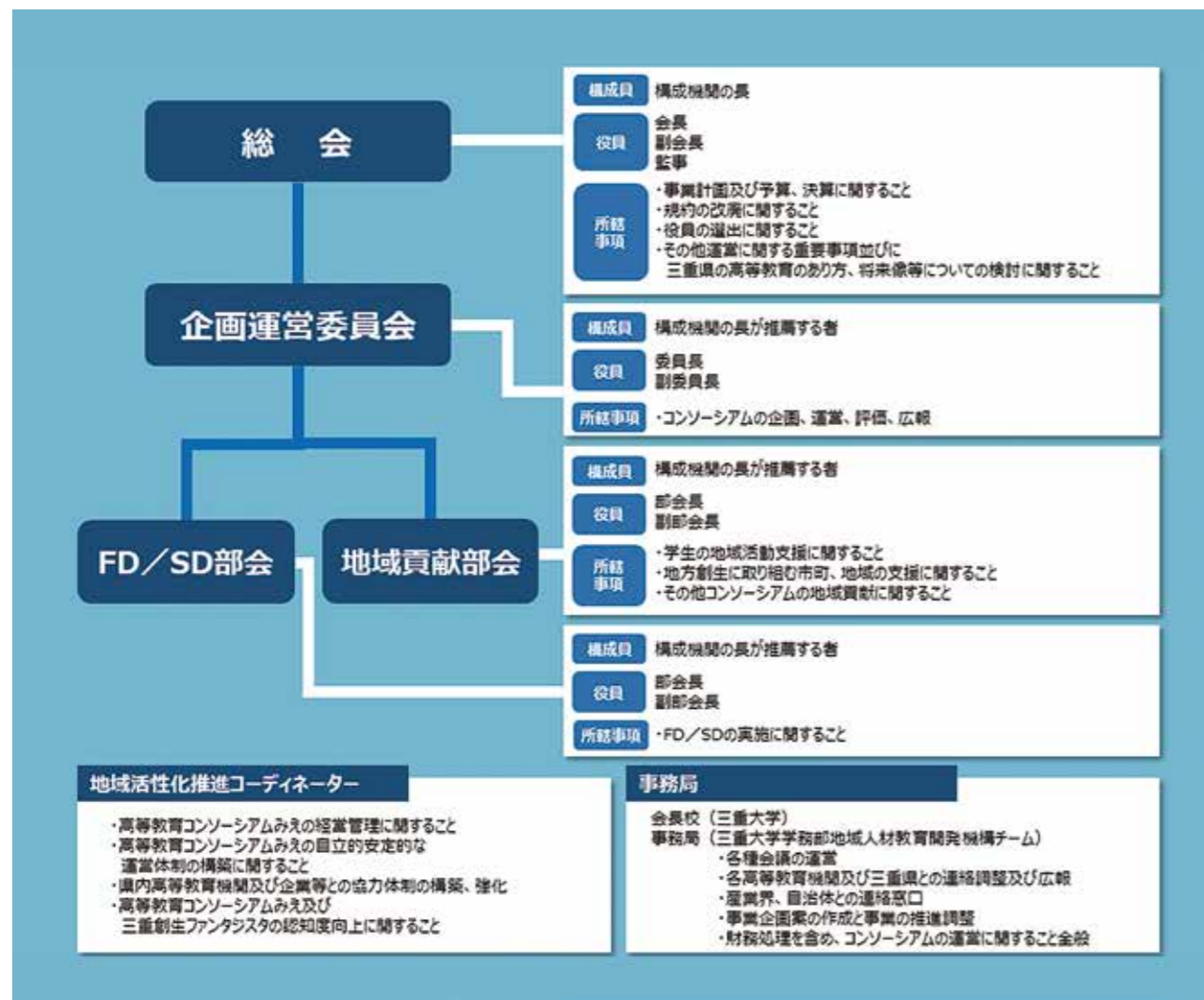
- ・事業計画(案)の作成、決算報告(案)の作成
- ・高等教育コンソーシアムみえの令和2年度以降の方向性について計画提案

●地域貢献部会(5月、10月、2月開催)

- ・受託事業の計画と実施
- ・「みえまちキャンパス」の企画及び実施

●FD/SD部会(12月開催)

- ・高等教育機関のFD/SDの情報共有(アンケートの実施)
- ・高等教育コンソーシアムみえにおけるFD/SDの検討及び、実施



高等教育コンソーシアムみえ

高等教育コンソーシアムみえ(以下、「コンソーシアムみえ」)は、県内高等教育機関と三重県で構成された組織であり、平成28年3月に設立された。COC+の後継組織としての機能を有しており、COC+補助事業終了後に、三重創生ファンタジスタの教育プログラムを継続していくための受け皿となることを決定し、検討を進めている。コンソーシアムみえでは、今年度以下の事業を中心に実施している。

- ① 三重創生ファンタジスタの教育プログラム等を含めた単位互換の実施
- ② 受託事業
- ③ 学生の地域活動の支援(みえまちキャンパスの開催)
- ④ FD/SDの充実
- ⑤ コンソーシアムみえの情報発信
- ⑥ その他の取り組み

①単位互換の実施

令和元年度は7つの高等教育機関で43授業を相互に開放し、12月31日現在で2高等教育機関から延べ23名の学生が受講し、他の高等教育機関の学生たちと交流を深めた。

高等教育コンソーシアムみえ
2019年度 単位互換 履修生募集

県内全高等教育機関の学生が履修できます!

普段受講できない
県内高等教育機関の授業
を履修しよう!

授業料 無料

出願方法・履修手続

- 所属学部の窓口へ所定の期間内に出願書類を提出してください。
- 開講科目シラバス・出願書類等は、WEBで確認してください。

出願期間

前期 2019年2月12日(火)~3月4日(月)

後期 2019年7月8日(月)~8月5日(月)

出願書類等の詳細はこちら

詳しくはWEBで!

高等教育コンソーシアムみえ 単位互換 検索

URL: <http://coneo-mie.jp/cta.html>

高等教育コンソーシアムみえ 単位互換協定参加高等教育機関

三重大学、三重県立看護大学、四日市大学、四日市看護医療大学、奈良経済科学大学、鈴鹿大学、皇學館大学、三重福祉大学、鈴鹿大学短期大学部、高田短期大学、ユマテック短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、長野福祉高等専門学校、近畿大学工業高等専門学校

機関名	所在地	開講科目	履修期間	単位互換
三重大学	津市	経済学	2019年2月12日~3月4日	○
三重県立看護大学	津市	看護学	2019年2月12日~3月4日	○
四日市大学	四日市	文学部	2019年2月12日~3月4日	○
四日市看護医療大学	四日市	看護学	2019年2月12日~3月4日	○
奈良経済科学大学	奈良	経済学	2019年2月12日~3月4日	○
鈴鹿大学	鈴鹿	工学部	2019年2月12日~3月4日	○
皇學館大学	皇學館	文学部	2019年2月12日~3月4日	○
三重福祉大学	津市	福祉学	2019年2月12日~3月4日	○
鈴鹿大学短期大学部	鈴鹿	文学部	2019年2月12日~3月4日	○
高田短期大学	高田	文学部	2019年2月12日~3月4日	○
ユマテック短期大学	ユマテック	工学部	2019年2月12日~3月4日	○
鈴鹿工業高等専門学校	鈴鹿	工学部	2019年2月12日~3月4日	○
長野福祉高等専門学校	長野	福祉学	2019年2月12日~3月4日	○
近畿大学工業高等専門学校	近畿	工学部	2019年2月12日~3月4日	○

②受託事業の実施

＜三重県からの受託事業＞

1. 「これからのみえづくり」に向けた大学生等の意識調査

平成31年度三重県経営方針において、注力する取り組みの柱の1つに「若者の県内定着につなげるために」を位置付け、推進している。若者の意識を把握することや今後の計画見直しにつなげることを目的に、構成機関である各高等教育機関が連携し、大学生等の意識調査を実施した。対象は県内14高等教育機関(大学、短期大学、高等専門学校)に在籍する卒業1年前の学年の学生。

標本数	4,617	＜アンケートの結果抜粋＞ 若者の県内定着についての質問である、将来就職したい地域の質問では、出身地域での就職を目指している傾向を伺うことができた。また、学生が三重県の政策分野で重要だと考えていることは、「医療」、「防災・減災」「結婚・妊娠・出産・子育て支援」となるなど、学生の望むことも把握できた。
回収数	3,513	
有効回答	3,490	
無効回答	23	
回答率	75.6%	



←三重県のホームページ
(http://www.pref.mie.lg.jp/VISION/index.htm)

2. 高等教育機関と連携したダイバーシティに関する講座等企画・運営業務

三重県が平成29年12月に策定した「ダイバーシティみえ推進方針」に基づき、「一人ひとり違った個性や能力を持つ個人として尊重され、誰もが希望を持って日々自分らしく生きられる、誰もが自分の目標に向けて挑戦できる、誰もが能力を発揮し、参画・活躍できる」ダイバーシティ社会の実現に向けて取り組みを進めており、高等教育機関の学生に向けた、ダイバーシティの考え方の浸透を進めるにあたり受託事業を実施した。三重大学をはじめ、皇學館大学、鈴鹿大学でも授業を実施し、今後公開講座の実施も予定している。



△三重大学における授業の様子



③学生の地域活動の支援(みえまちキャンパスの開催)

令和2年2月19日(水) コンソーシアムみえ主催の「みえまちキャンパス in 三重短期大学」を開催する予定。「みえ」の「まち」をキャンパスとして学び、地域活動等をしている学生の発表の場として開催する。本年度はコンソーシアムみえとして3回目の開催であり、多くの学生によるプレゼンテーション発表や、パネル展示を予定している。



④ FD/SD の充実

コンソーシアムみえ主催で、これまで2回にわたり実施してきた合同のFD/SDについて、内容をより充実させるため、新たに部会を設置した。今年度は2月に実施する予定である。

⑤コンソーシアムみえの情報発信

コンソーシアムみえがCOC+事業の後継組織として、三重創生ファンタジスタの教育プログラムを継続実施していくことが決定されたことから、教育プログラムの周知とともに、コンソーシアムみえの事業内容について広報した。



高等教育コンソーシアムの地域活性化推進コーディネーターを中心に、パンフレットの配付等を行い、コンソーシアムみえ事業内容の周知にあたった。(配布先：松阪市(産業文化部)、松阪市観光協会、いなべ市(企画部)、津市(農林水産部、ビジネスサポートセンター)、四日市商工会議所、三重県男女共同参画センター、三重県産業支援センター、三重県観光連盟、中日新聞、夕刊三重等)

SciLets 授業教材でのPR

★ビデオ授業 開講
2019.11.08

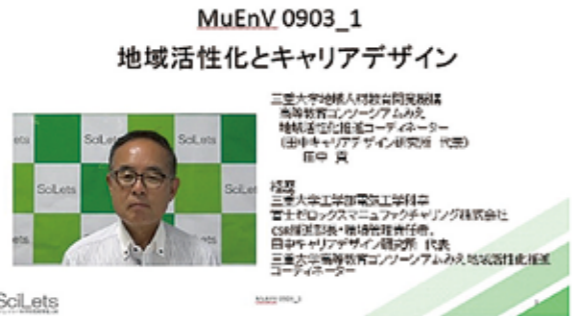
第9分野の選択科目を新しく開講いたしました！

第9分野の選択科目を新しく開講いたしました！

【第9分野】地域活性化とキャリアデザイン (講師 田中 賢)

コミュニティには共同体、地域という意味があるがそれと共に様々な人との情報交換、ネットワークそのものという考え方もある。少子高齢化や地域の過疎化が進む中で将来のカギを握る若者がどのように地域を見ているかを意識調査し、同時に地域での具体的な活動事例を見てみる。また狭い範囲で地域を考えるのではなく国際貢献活動から見えてくる海外での課題を地域での活動に役立てるために自らのキャリアデザインを考えながら考えていく。これもインバウンド(外から内に入り込む)の一つの考え方である。

MuEnV_0903_1
地域活性化とキャリアデザイン



三重大学地域人権教育研究センター
高等教育コンソーシアムみえ
地域活性化推進コーディネーター
(中核キャリアデザイン研究班 代表)
田中 賢

経歴
三重大学工学部電気工学科
富士ゼロックス・システムソリューション株式会社
CSR推進部長・地域管理責任者
日本キャリアデザイン研究班 代表
三重大学高等教育コンソーシアムみえ地域活性化推進
コーディネーター

その他の取り組み

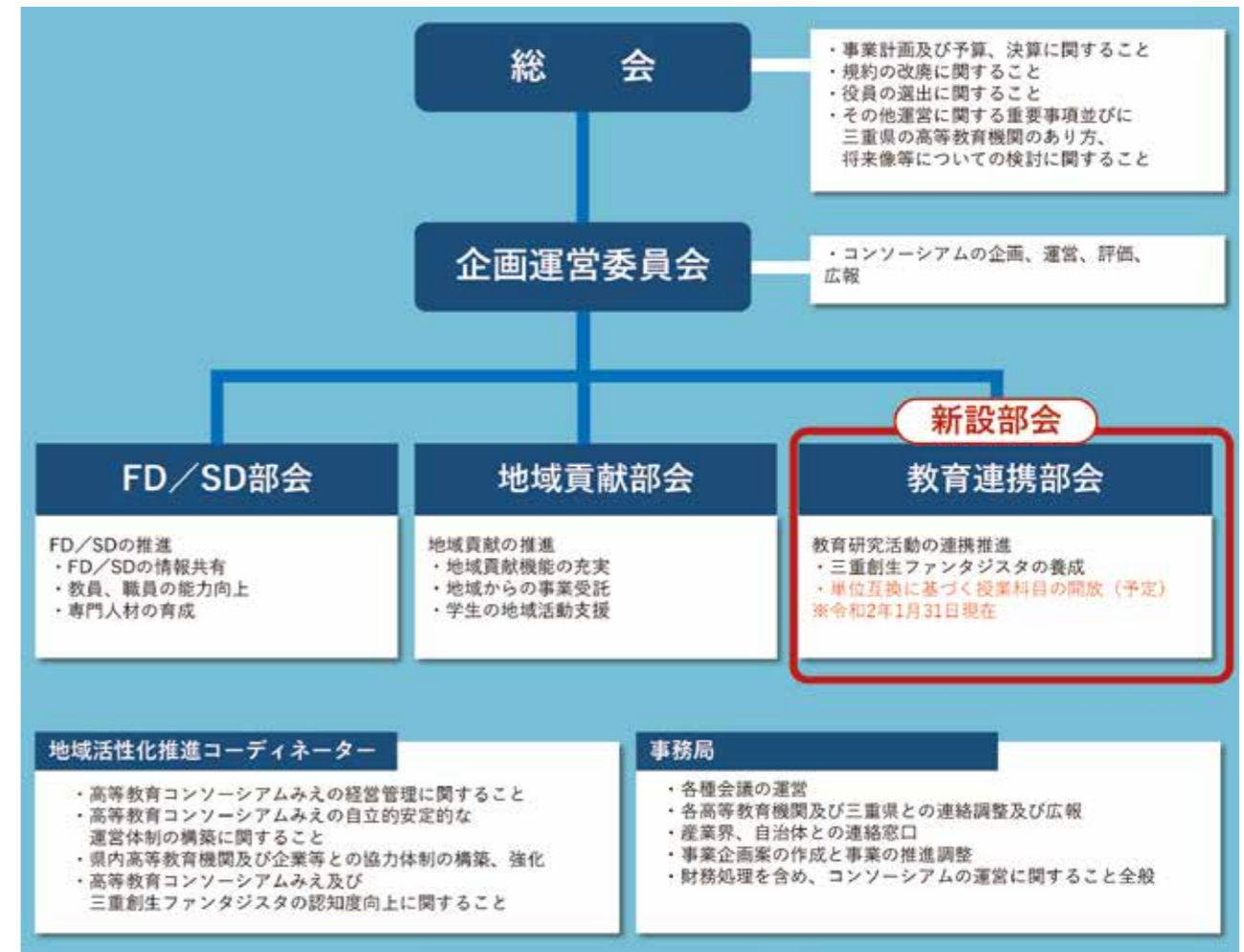
留学生を活かした地域の支援プロジェクト「松阪市観光モニターツアー」
日時：令和元年11月21日(木)
場所：松阪市内

松阪市観光協会と協働で、松阪市内を観光するツアーを実施した。当日は、四日市大学、三重大学から留学生9名が参加した。外国人観光客の取り込み戦略の一環として、留学生に松阪の街並み散策や茶道・松阪肉料理体験等をしてもらい、意見を聞き、今後の情報発信等に役立てたいという要望とコンソーシアムみえの地域貢献がマッチした取り組みである。今後もこのような取り組みを続けていく予定。



次年度以降の体制

COC+ の後継組織であるコンソーシアムみえは、県内高等教育機関と三重県で構成された組織であり、令和2年度以降は、COC+ の事業を引き継ぎ、これまでの事業も含めてさらに組織内の連携を深めていく。組織体制としては、総会、企画運営委員会、地域貢献部会、FD/SD 部会に、新たに教育連携部会の設置を予定している。教育連携部会では、三重創生ファンタジスタの養成を進めることとしている。



資料一覧

各種制作物

令和元年度2月現在までに制作した印刷物等一覧。

●令和元年度三重大学 三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻ガイド



●平成 30 年度報告書



●三重創生ファンタジスタ News Vol.7-11



おわりに

COC+ 事業に携わった各関係者から、これまでの取り組みについてメッセージをいただいた。

COC+ 事業は、平成 27 年度から三重大学を地（知）の拠点大学として始まり、参加校として三重県内の高等教育機関、また、連携自治体として三重県、さらに事業協働機関として県内企業が参画しています。この5年間を振り返って感じるのは、高等教育機関同士の教学面での情報交換がそれ以前に比べて確実に活性化したということです。従来から私学の会議体はあったものの、本学に限って言えば、その内容が学内で共有されることはほとんどなかったことから、COC+ 事業がなければ教学に係る充実した対話が実現することは困難だったと推察します。取組の一つである Job キャラバンでも、協力してくださる県内企業の顔ぶれが学校の立地地域ばかりでなく、全県的な広がりを見せたことも大きな成果でした。

今後、COC+ 事業は高等教育コンソーシアムみえに承継されます。それぞれの高等教育機関が主体的にこの枠組みを相互活用する意識を高めることが、三重の高等教育の魅力向上につながると信じています。

皇學館大学教育開発センター長 齋藤 平

平成 29 年度から令和元年度まで3年間「三重創生ファンタジスタの養成事業」に参加し、三重県の活性化に取り組む学生団体「三重創生ファンタジスタクラブ」の初代代表として団体を牽引しました。最初は三重県の活性化という大きな目標に悩んでいましたが、学生同士で何度も想いをぶつけ合い、教職員さんの助けも借りながら、学生らしい独創的なアイデアを武器に三重県の各地で地域活動を起こしてきました。今では 40 人を超える団体に成長し、少しずつ活動規模も広がっています。

私自身も3年間で活動のプレゼンや地元企業との交流など様々な体験を経て、プレゼン力やコミュニケーション能力に確かな成長を感じるようになりました。

また、「三重創生ファンタジスタの養成事業」を通して、将来も地域で活躍する人材でありたいと考えるようになり、地元の公務員を志すきっかけになりました。これからも地域に根付き、「三重創生ファンタジスタ」として地域の事を考えていきます。

三重大学 人文学部4年 岡本 守永

私が「食と観光実践」の講義を受けようと思ったのは、資格が取れるということが大きかったです。伊勢志摩でフィールドワークを行うことも興味はありましたが、この講義を受けることで、三重創生ファンタジスタ資格（アドヴァンス）を取ることができ、三重県内で就職をしたいと考えていた私にとって非常に魅力的でした。そして、「食と観光実践」の講義を受け、私はファンタジスタの資格を取得することができましたが、資格以上に他大学の同世代の学生との交流ができたことが良い経験になったと思います。四日市大学ではフィールドワークが多いですが、学年や学部の違う他大学の学生と行うことで、様々な疑問点やアプローチの仕方の発見があり、学内で行われるグループワークより活発な意見交換をすることができました。フィードバックとして各グループの発表を聞く際には、同じフィールドにしても全く違う問題提起や解決策があり、自分たちの発表以外でも多くの学びがありました。

四日市大学 総合政策学部3年 田端 文音

私は、平成 29 年度から3年間COC+ 事業に参画し、主に本事業の目標の進捗管理を行う第1分科会の分科会長として、県内高等教育機関の皆様と一緒に取組を進めてきました。

本事業では、これまでの4年間で、5つの目標項目のうち4項目において目標を達成するとともに、事業協働機関への就職者数の増加に加えて、「三重創生ファンタジスタ」の養成については、資格取得者（令和元年度は取得見込みを含む）が約 800 名（令和元年度までの累計）になり、今後も三重大学を中心に毎年数百人規模で取得が見込まれるなど、本事業で始めた取組が進展し、成果が徐々に現れてきています。

しかしながら、三重県では人口の転出超過が続いており、その8割を 15～29 歳の若者が占めるなど、若者の県内定着は厳しい状況となっています。

こうしたことから、令和2年度以降も、若者の県内定着に向け、本事業で構築された産学官のオール三重体制を生かしながら、今後、「三重創生ファンタジスタ」の養成等の取組を進めていく予定である「高等教育コンソーシアムみえ」の一員として、県内高等教育機関振興の取組に参画していきます。

三重県戦略企画部戦略企画総務課 主幹 三枝 太郎

オール三重体制で構築された COC+ の事業に関して、事業協働機関の 1 社として、共に活動をさせていただけたことを心から感謝申し上げます。教育プログラム開発委員会に参加し、Job キャラバンやエースセミナーへの協力を行いました。会議の中で、県内各高等教育機関の先生方や他の委員の皆様のご意見や想いを伺い、「私たちも地元企業としての役割を果たさなければ！」という使命感が生まれました。ファンタジスタ資格啓発の一助になればと、昨年、自社のウェブサイトの採用ページに、提出書類の例として「三重創生ファンタジスタ資格など」と掲載しました。初めて資格取得予定の学生から応募があった時には、とても嬉しかったことを覚えております。今後、ファンタジスタ資格を持つ（専門分野だけではなく、地域に根差した「歴史・文化」「産業」について学び、実際に現場で地域の現状を知り、魅力や課題を発見された）皆さんが、社会人として地域の中で、その能力を発揮していかれることを期待しております。

株式会社マサグループ本社 経営管理チーム リーダー 奥野 育子

地方銀行は地域に根差した企業であり、お客さまは当然地域の皆さまが中心ですが、銀行内でも三重に縁のある従業員が多く働いています。その点で「地域の活性化」は私たち百五銀行にとっても使命だと考えています。その使命を果たすためにどのような人材が当行に必要なかを考えますと、やはり地域のことを、地域経済に携わる当事者として真剣に考えられる人材だと思います。

これまで採用選考において、百五銀行では人柄を重視してきました。そのため、ファンタジスタ資格を特別扱いしようという考えは、ありませんでしたが、振り返ってみると、資格を取得している方には強い自信を感じました。面接でその理由を探ると、実際に地域に飛び込んで課題を発見し、解決に向けて自ら行動するという経験が自信につながっているようです。

当事者意識を持って経験を積んだ三重創生ファンタジスタが、これからの三重の活性化に向けて大きな追い風になると期待をしています。

株式会社百五銀行 人事部人事課 課長代理 松本 和也

～ Memo ～

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」
地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成

編集・発行 三重大学地域人材教育開発機構

問合せ先

三重大学学務部地域人材教育開発機構チーム

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577

TEL | 059-231-9902・9969・9940 FAX | 059-231-2354 MAIL | jimu@cocpls.mie-u.ac.jp

HP | <http://www.cocpls.mie-u.ac.jp/> (COC+) twitter | @MieSFC (三重創生ファンタジスタクラブ)



発行月 令和2年 2月